

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2014年 11月

「神格-御子：二重の性質」「男女がどのようにキリストを映したか」

「第三天使のメッセージ『黙示録 13章の獣と小羊のような獣』」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「神格—御子：二重の性質」 4

聖書の教え

朝のマナ

「男女がどのようにキリストを映したか」 9

キリストを映して

現代の真理

「黙示録 13 章の獣と小羊のような獣」 70

三重のメッセージ - 第三天使のメッセージ -

力を得るための食事

「和風ロールキャベツ」 80

お話コーナー

「ものごとをちゃんとやる」 82

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話：0494-22-0465

FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>

メール：support@4angels.jp

発行日 2014年10月31日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Images on front cover and on page 7

最高の目標

使徒の時代にキリスト教の信者たちは、真剣さと熱意に満たされていた。彼らは主のためにたゆまず働いたので、激しい反対があったにもかかわらず、比較的短い間にみ国の福音は地上の人の住む所へもれなく伝えられた。このときイエスに従った者たちがあらわした熱意は、後世の信者たちの励ましのために、靈感による筆によって記録された。主イエスが使徒の時代におけるキリスト教会全体の象徴としておおいになったエペソの教会について、忠実なまことの証人であるかたが次のように宣言された。

「わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っている。また、あなたが、悪い者たちをゆるしておくことができず、使徒と自称してはいるが、その実、使徒でない者たちをためしてみ、にせ者であると見抜いたことも、知っている。あなたは忍耐をし続け、わたしの名のために忍びとおして、弱り果てることがなかった」(黙示録 2:2, 3)。

最初は、エペソの教会の経験は子供のような単純さと熱情が特徴だった。信者たちは神のみことばにことごとく従おうと熱心に努めた。そして彼らの生活は、キリストに対する熱烈で誠実な愛をあらわした。彼らは心にキリストが内住しておられたので、神のみこころを行うことを喜んだ。あがない主に対する愛に満たされ、彼らの最高の目標は、魂を主に導くことであった。彼らはキリストの恵みの尊い宝を死蔵しようとは思わなかった。彼らは自分たちの召しの重要さを自覚し、「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」という使命を担って、地の果てにまで救いのよいおとずれを運んで行きたいという願いに燃えた。そして世は、彼らがイエスと共にいたことを知るようになった。悔い改め、ゆるされ、きよめられ、聖なるものとされた罪深い人々が、み子を通して神との共労者になった。教会員は心も行動も一致していた。キリストに対する愛が、彼らを共に結び合わせる金の鎖であった。

彼らは主を更にもっと完全に知ろうとした。そして彼らの生活にキリストの喜びと平安があらわされた。彼らは困っている孤児ややもめを見舞い、みずからは世の汚れに染まらずに身をきよく保った。そして、この事がうまくできなければ、自分たちの信仰の表明に矛盾し、あがない主を拒むことになるかと悟っていた。

(患難から栄光へ下巻 282, 283)

1章 神格(2)

B. 御子

キリスト、すなわち神格の第二位のお方(テモテ第一 3:16, テトス 2:13, ヘブル 1:8)は、とこしえに、自存しておられる神の御子で、御父の「真の姿」でいらせられます(ヘブル 1:3, ヨハネ 14:7-10)。御父と共に、このお方は万物の始まり(黙示録 3:14, ギリシャ語アルキー創始者)です。ヨハネ 1:1-3, コロサイ 1:15-17; ヘブル 1:2; ローマ 9:5 (ヨハネ 17:3; ヨハネ第一 5:20; イザヤ 9:6; ヨハネ 6:33 参照)。

キリストの永遠の先在性については聖書の中にはっきり述べられています。ミカ 5:2; 箴言 8:22-30; ヨハネ 1:1, 2, 14; 17:5, 24。イザヤとマタイを比較すると、キリストが神格の一部であられることがわかります。出エジプト記 3:14 とヨハネ 8:58 もご参照ください。

キリストも神であられ、御父と一つであり、また等しくあられるので、このお方もまた礼拝されるべきです。もしこのお方が被造物であったり、御父より後に存在されるようになったのであれば(黙示録 19:10)、そうではありません。ヨハネ 10:30; 20:28; マタイ 14:33; ルカ 4:8; ピリピ 2:9-11; ヘブル 1:6; ルカ 24:52。

キリストはご自分の神性を捨てることなく、人性を受けられ、おとめマリヤからお生まれになったときに、受肉において人となられました。イザヤ 7:14; マタイ 1:23; ルカ 1:35。ベツレヘムにおけるこのお方の誕生の際、このお方は墮落前のアダムの性質をお取りになったのではなく、アブラハムの子孫、またダビデの子孫となられたのです。ヨハネ 1:14; ローマ 8:3; ヘブル 2:14, 16, 17; ピリピ 2:7, 8; ローマ 1:3, 4; テモテ第二 2:8。

キリストがこの世に来られたのは、「失われたものを尋ね出して救うため」であり(ルカ 19:10)、わたしたちの義認と聖化のために生き、また死ぬためであり(ローマ 5:9, 10; ヨハネ第一 1:9, ヨハネ 17:19)、わたしたちの罪を取り除くため

であり(マタイ 1:21; ヨハネ 1:29; テモテ第一 1:15; ヨハネ第一 3:5)、わたしたちを律法の刑罰から贖うためであり(ガラテヤ 3:13; 4:4, 5)、肉において罪を罰するためであり、わたしたちが聖霊によって律法の義を果たすことができるようにするためであり(ローマ 8:3, 4)、わたしたちに従順の模範を与えるためであり(ヨハネ 15:10; ペテロ第一 2:21-24; ヨハネ第一 2:5, 6; ヘブル 5:8, 9)、そして悪魔のわざを滅ぼしてしまうためです(ヨハネ第一 3:8)。

人間としてキリストはあらゆる点において誘惑に会われました。しかし、このお方は罪を知りませんでした。マルコ 1:13; ルカ 4:1, 2, 13; ヘブル 2:18; 4:15; ヨハネ 14:30; コリント第二 5:21; ペテロ第一 2:22。

十字架上の身代わりとしてキリストの死は、人類の罪の贖罪のための犠牲の部分(血の捧げ物)を備えました。この備えを受け入れる人々だけが救われるのです。イザヤ 53:1-12; ヨハネ 3:14-17; コリント第二 5:19; ヘブル 9:22; ペテロ第一 1:18, 19; ヨハネ第一 1:7。贖罪のとりなしの部分、天の聖所におけるキリストの仲保によって備えられています(ローマ 5:8-11; 8:34; ヘブル 8:12)。

二重の性質

「神格が人間になったのでもなければ、二つの性質を混ぜ合わせることによって人間が神格化されたのでもなかった。キリストはわたしたちが所有しているのと同じような罪深く、腐敗し、墮落した不忠実を持っておられたのではなかった。なぜなら、もしそうであれば、このお方は完全な捧げ物となることができにされないからである。(セレクトド・メッセージ 3 巻 131)

「[キリスト]は二重の性質、すなわち同時に人性と神性を持っておられた。このお方は神であり人であられた。」(SDA パイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1074)

「二つの性質が神秘的に一人のお方一人なるキリスト・イエスのうちに混じりあっていた。」(同上 5 巻 1113)

「キリストはご自分の人性によって人類に接し、ご自分の神性によって神のみ座をとらえておられた。人の子としてイエスは服従の模範をわれわれに示された。神の子としてイエスは服従する力をわれわれに与えて下さる。」(各時代の希望上巻 7)

神性

「キリストは本質的に、そして最高の意味において神であられた。このお方は永遠にわたって神と共におられ、万物を治める神であられ、とこしえにほむべきお方である。」(セクレタド・メッセージ 1巻 247)

「ご自分の先在性について語られるとき、キリストは思いをはてしない時代に来て呼び戻される。このお方はわたしたちにとこしえの神と緊密な交わりのうちにおられなかった時は一度もないと保証される。」(伝道 615)

「永遠の昔から、主イエス・キリストは天父と一つであられた。」(各時代の希望上巻1)

「[パリサイ人と役人たちと人々の] 沢山の群衆は、沈黙につつまれた。永遠の存在についての観念を表すためにモーセに与えられた神の名が、このガリラヤのラビによって自分のものとされた。イエスは、ご自分が自力によって存在されるおかた、『その出るのは昔から、いにしえの日からである』とイスラエルに約束されたおかたであると宣言された(ミカ 5:2)。」(同上 261)

「キリストの墓で、父があなたを呼んでおられますという力強い天使の声を聞かれたとき、救い主は、ご自身のうちに生命によってよみから出てこられた。『わたしが命を捨てるのは、それを再び得るためである。わたしには、それを捨てる力があり、それを受け取る力もある』と言われたキリストのことばが事実であったことがいま証明された(ヨハネ 10:17, 18; 2:19)。キリストが祭司たちと役人たちに、『この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起こすであろう』と語られた預言がいま成就した。

ヨセフの開かれた墓のほとりで、キリストは勝利のうちに、『わたしはよみがえりであり、命である』と宣言された。このことばを言うことができるのは神のみである。すべての被造物は神のみこころと力によって生きている。彼らは神に依存してその生命を受ける。最高のセラフから最もいやしい生物に至るまで、すべてのものは生命のみなもとである神から力を補充されるのである。神と一つであられるおかただけが、わたしはいのちを捨てる力があり、またそれを受け取る力があると言うことがおできになった。キリストはその神性のうちに死のなわめをたちきる力を持っておられた。」(同上 315, 316)

「このお方のうちに、神格がかたちをとって満ちみちていた。キリストが十字架

にかかられたとき、死んだのはこのお方の人性であった。神性は沈むことも死ぬこともなかった。それは不可能なことである。」(SDA バイブル・コメント [E・G・ホイト・コメント] 5 巻 1113)

「イエスの霊は墓の中でこのお方の体と共に眠りについていたのであって、天へ向かって飛んでいき、そこで分離した存在を維持し、ご自分が飛び去ってきた体に没業を施しながら嘆いている弟子たちを見下ろしておられたのではなかった。イエスの命と知性をなしていた一切のものはこのお方の体と共に墓の中に残っていた。そしてこのお方が出てこられたとき、それは存在全体としてであった。このお方はご自分の霊を天から召還する必要はなかった。このお方にはご自分の命を捨てる力もあり、それをふたたび取り上げる力もあった。」(同上 1150, 1151)。

「キリストの神性は、永遠の生命についての信者の確信である。」(各時代の希望中巻 346)

人性

「アダムがエデンで罪を知らなかったときでさえ、神のみ子が人の性質をおとりになることは無限の屈辱に近かった。ところがイエスは、人類が四千年にわたる罪によって弱くなっていた時に人性をおとりになったのである。アダムのすべての子らと同じように、イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった。」(同上上巻 35)

「無限の代価を払って、また人と同様に天使たちにも神秘的な過程によってキリストは人性を取られた。ご自分の神性を隠して、ご自分の栄光をわきへおき、このお方はベツレヘムで赤子としてお生まれになった。」(ユース・インストラクター 1899 年 7 月 20 日)

「イエスが人性を取られ、人のさまとなられたとき、このお方は人間の器官をすべて持っておられた。このお方の必要は、人の必要であった。このお方は身体的に満たされなければならない必要があり、休みを得なければならない身体的な疲れがあった。御父への祈りによって、このお方は義務と試練のために準備をされた。」(SDA バイブル・コメント [E・G・ホイト・コメント] 5 巻 1130)

「このお方はわたしたちの弱さにおいて兄弟であられる。しかし、同じような情欲を持っておられたのではなかった。罪のないお方として、このお方の性質は

悪にしり込みされた。」(教会への証 2 卷 202)

「神の御子の人性はわたしたちにとってすべてである。それはわたしたちの魂をキリストに、そしてキリストを通して神へ結びつける黄金の鎖である。これこそ、わたしたちの研究課題となるべきである。キリストは本当の人であられた。このお方は人となられることによってご自分のへりくだりについて証拠をお与えになった。しかしなお、このお方は肉における神であられた。わたしたちがこの主題に近づくと、燃える柴のところでキリストからモーセに語られた次の言葉に注意を払うがよい。『足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである』(出エジプト記 3:5)。』(レクテッド・メッセージ 1 卷 244)

キリストを映して

Reflecting CHRIST



11月 「男女がどのようにキリストを映したか」

11月1日

光を担う者となるべき神の子ら

「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」
(マタイ 5;16)

神は決して一人の人の思いと判断が支配的な力になるようにと意図してはおられない。このお方がなすべき特別な働きを持っておられるとき、いつも要求に応じる用意のできた人を持っておられる。各時代において、神の御声が、だれがわれわれのために行くであろうか、とお尋ねになるとき、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」との応答があった。いにしえの時代、主はご自分の働きに多様なタラントの人々を結び付けられた。アブラハム、イサク、ヤコブ、柔和と知恵のあったモーセ、そして様々な能力のあったヨシュアはみな神の奉仕に参加した。ミリアムの音楽、デボラの勇気と敬神、ルツの子としての愛情、サムエルの従順と忠誠—これらはみな必要なものであった。断固とした品性の特質を持ったエリヤを、神はイゼベルに裁きを下すためご自分のお定めになったタイミングでお用いになった。

神は天来の賜物を用いない人々に聖霊をお与えになることはない。しかし、他の人々を啓発し、励まし、祝福しようと努めて、自分自身から抜け出て離れる人々には、用いるための能力と精力が増し加えられる。彼らが光を与えれば与えるほど、ますます受けるのである。(ザン・ウッチマン 1905年10月31日)

どの時代においても、「彼ら……のうちにいますキリストの霊」は、神の真の子らをその時代の人々の光とした(ペテロ第一 1:11)。ヨセフはエジプトにおいて光を掲げる者であった。彼の純潔、慈愛、親を思う愛は偶像教国のただ中でキリストをあらわした。イスラエル人がエジプトから約束の地へ行く道中、彼らの中のまごころをもった人々は、周囲の国々の光であった。彼らを通して

神は世に現わされた。バビロンではダニエルとその友らが、ペルシャではモルデカイが暗い王宮に輝かしい光を放った。

同じように、キリストの弟子たちは天へ向かう途上で光を掲げるものとして置かれている。神について誤った考えをもち、暗黒に閉ざされている世界に、彼らを通して父なる神のあわれみといつくしみがあらわされるのである。彼らのよい行ないを目撃して、他の人々は天にいます父をあがめるようになる。実に賛美されるにふさわしく、またその姿に似るにふさわしい品性をおもちになっている神が、宇宙の王座にいますことが明らかにされたからである。心に燃える神の愛、生活にあらわれるキリストのような調和は、世の人々が天のすぐれたところであることを知るようにならされた天のかすかな表われにほかならない。

こうして人々は「神がわたしたちに対して持つておられる愛を……信じ……る」ように導かれるのである(ヨハネ第一 4:16)。こうしてかつては罪深く、墮落していた魂は変えられ、「その栄光のまえに傷なき者として、喜びのうちに」立たせられるのである(ユダ 24)。(祝福の山 51, 52)

11月2日

エノクは神と共に歩んだ

「信仰によって、エノクは死を見ないように天に移された。……彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである。」(ヘブル 11:5)

品性の変化をもたらす神の知識こそ、わたしたちが大いに必要としているものである。もしわたしたちがこのお方のご目的を果たしたいなら、わたしたちの生活において、み言葉の教えに相応した神の啓示がなくてはならない。

エノクとバプテスマのヨハネの経験は、わたしたちの経験となるべきものを表している。わたしたちがしてきたよりもはるかにもっと、これらの人々一死を見ないで移された人と、キリストの初臨の前に、主の道をまっすぐにする準備のために召された人一の生涯を研究する必要がある。

エノクについては 65 歳になって、息子を生んだと記されている。それから 300 年間彼は神と共に歩んだ。人生の初期に、彼は神を愛し、恐れ、このお方の戒めを守っていた。しかし、自分の長男の誕生後、彼はより高い経験へ到達した。彼は神とのより緊密な関係へと引き入れられた。彼が自分の子供の父親に対する愛と、その保護に対する単純な信頼を見たとき、また長男に対する自分自身の心の深く慕う優しさを感じたとき、彼はご自分の御子という賜物のうちにあらわされた神の驚くべき愛と、神の子らが天父に安んじることのできる信頼について尊い教訓を学んだ。キリストを通じての神の無限にして測りがたい愛が昼夜の彼の瞑想課題となった。魂をつくした熱烈さをもって、彼はこの愛をまわりに住む人々に表そうと努めた。……

世紀を重ねるにつれ、彼の信仰はますます強くなり、彼の愛はますます熱くなった。彼にとって祈りは魂の呼吸であった。彼は天の雰囲気の中に生きた。……神の僕に働いた神の力は、彼の言葉を聞かざる者に感じられた。ある者は警告に注意を払い、自分たちの罪を捨てた。しかし、多大な群衆は厳粛な

メッセージをあざけた。……

300年の間、エノクは天と調和するために心の純潔を求めてきた。三世紀の間、彼は神と共に歩んだ。日に日に彼はより緊密な一致を切望した。交わりはますます近くなり、ついに神は彼をご自分の許へとられた。彼は永遠の世界の敷居に立ち、祝福の地と彼との間ほんの一步しかなかった。そして、今や戸は開かれ、地上で長く進めてきた神との歩みは続き、彼は聖都の門をくぐった。彼が人の中でそこに入った最初の者であった。……このような交わりに神はわたしたちを招いておられる。エノクの聖潔が、主の再臨の時に人々の間から贖われる人の品性の聖潔でなければならない。(教会への証 8 卷 329～331)

11月3日

義の説教者

「ノアの時にあったように、人の子の時にも同様なことが起るであろう。ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていたが、そこへ洪水が襲ってきて、彼らをことごとく滅ぼした。」(ルカ 17:26, 27)

広がり、増加するのが罪の性質である。アダムの最初の罪以来、世代から世代にわたって、それは伝染病のように広がってきた。世界がまだ黎明期にあった時でさえ、罪の規模は恐るべきものになっていた。神の律法への憎しみ、そしてひいては当然の結果としてあらゆる善に対する憎しみが全世界的になっていた。神、すなわち人を創造し、惜しめないみ手をもって彼に豊かな恩恵をお与えになったお方が、ご自分が創造なさった者から辱められ、ご自分の賜物を受けた者からないがしろにされ、侮られた。しかし、罪深い人間が自分の慈愛に満ちた賦与者を忘れたにもかかわらず、神はご自分がかたちづくられた被造物をお忘れにならなかった。「天から雨を降らせ、実りの季節を与え」、人の心を「食物と喜びとで、……満た」して下さっただけでなく、このお方はまた警告と訴えのメッセージをも送って下さった。人の悪、また神聖な律法を犯した結果は人の前に完全に置かれていた。

ノアの時代に、世の悪は非常に大きく、神はもはやそれに耐えることができにならなかった。……しかし、このお方は人類を憐れんで、その愛のうちに受け入れるすべての人のため避難所を提供された。彼は人々に伝えられるべきメッセージをノアにお与えになった。「わたしの霊はながく人の中にとどまらない(いつまでも人に訴えない)」。……神のみ霊は定められた時がほとんど満ちようとしていた時、すなわちノアとその家族が箱舟に入り、神のみ手がその戸を閉めた時まで、反逆の人類に訴え続けてきた。憐れみは黄金のみ座より立ち上がり、もはや罪深い罪人のためにとりなすことをしなかった。

その世代のすべての人が完全な意味において偶像礼拝者であったわけではなかった。多くの人々は神とその律法の知識を持っていた。しかし、彼らは忠実な義の説教者のメッセージを拒絶したばかりではなく、彼らのすべての感化力を用いて、他の人々が神に従順になることを妨害した。すべての人に試練と信任の日が訪れる。その当時の世代には、ノアが来たるべき破滅について警告の調子を響かせている間に、彼らの機会と特権の日があった。しかし、彼らは自分たちの思いを神ではなく、サタンの支配に渡してしまった。そして、サタンは初めの父祖に対してしたように彼らを欺いたのであった。サタンは彼らの前に光と真理の代わりに、闇と偽りを置いた。そして彼らは彼の詭弁と虚言を受け入れ、その一方彼らを救う真理を妄想として拒絶したのであった。多くの人が正しい側に立たなかった。(サインズ・オブ・タイムズ 1886年4月1日)

11月4日

ノアは岩のように立った

「主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、……しかし、ノアは主の前に恵みを得た。」(創世記 6:6-8)

世は神の正義とその律法に敵対して隊列を組み、そしてノアは狂信者として見られていた。サタンはエバを誘惑して神に従わないように誘惑しながら、次のように言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」。偉人、すなわち世的に榮譽を受け、賢い人々は同じ話を繰り返した、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」。彼らは言う、「神の脅迫は、おびやかすためであって、決して実施されることはない。警告を受ける必要はない。世界を造られた神によって世界が減ぼされるとか、神が創造された存在の刑罰といったことは決して起こることはない」。……そこで人々はあたかも神がご自分の僕を通して彼らに語られなかったかのように、自らの心を神のみ前にへりくだらせず、自分たちの不従順と悪を続けた。

しかし、ノアはあらしのただ中で岩のように立った。彼はあらゆる種類の悪と道徳的腐敗に囲まれていた。しかし、大衆の軽蔑とあざけりのただ中で、全般的な悪と不従順のただ中で、彼は自らをこのお方の聖なる高潔さと揺り動かさない忠実さによって区別した。彼の周囲の世界は神を軽視し、あらゆる形式の過度な放縦にふけり、それらによってあらゆる種類の暴力と犯罪に至っていたが、忠実な義の説教者は、その当時の人々に、洪水が地の住民の過度の邪悪さのゆえに世界を水で覆うことを宣言した。彼は彼らに悔い改めて信じ、箱舟の中に避難所を見出すようにと警告した。

ノアのメッセージは彼にとって現実であった。世の嘲りと冷やかしのただ中で、彼は曲がることのない神のための証人であった。彼の柔和と義は、彼の周囲で絶えず行われていた忌まわしい犯罪や陰謀や暴力とはっきり対照をなし

ていた。彼の言葉には力が伴っていた。なぜなら、それはご自分の僕を通して人々に語られる神のみ声だったからである。120年の間、人間の知恵が判断する限りとても起こり得ないと思われた事件について語る彼の厳粛な警告の聲が当時の人々の耳に聞こえたが、その間、神とのつながりが彼を無限の力の強さのうちに強力にした。ある人々は深く罪を自覚し、警告の言葉に注意を傾けた。しかし、あまりにも多くの冷やかしの嘲りがあったために、彼らも同じ精神にあずかり、憐れみの招きに抵抗し、改革することを拒み、まもなくもっとも大胆かつ反抗的に嘲る者に混じるようになった。なぜなら、一度光を持ちながら、神の御霊の説得に抵抗する人ほど、向こう見ずで、罪においてどこまでも進む者はないからである。……

嘲りの世界の不信のただ中で、ノアの信仰はなんと単純で幼子のものであったことであろう。……彼は世に神の言われたことをそのまま信じる模範を残した。(サインズ・オブ・タイムズ 1886年4月1日)

11月5日

ノアは神のみ言葉を力をもって宣布した

「ノアはすべて神の命じられたようにした。」(創世記 6:22)

アダムに語られた言葉が〔ノアによって〕繰り返された一罪とサタンはいつまでも勝利しないのであった。神をおそれる者に勝利があるのであった。神が人々の邪悪さのゆえに裁きのうちに世にもたらそうとしておられたことについて彼の声があがったとき、使命者の言葉に対して大反対が表わされた。しかしながら、反対は全世界的なものではなかった。なぜなら、ある人々はノアのメッセージを信じ、熱心に警告を繰り返したからである。

しかし、賢人だと思われていた人々が求められ、ノアのメッセージに反駁する議論を提示するように要請された。そして世は悪の君と戦っているのではなく、平和的な関係にあった。彼らは「主はこう言われる」をわきに置き、自然の力にノアが予告したような変化が起こることは不可能だと示した当時の哲学者に耳を傾けるための言い訳は何でも歓迎した。墮落した人間と墮落した天使の間に敵意はなかった。両者とも背信を通して邪悪であり、邪悪さはどこに存在しても、神に敵対する同盟を結んでいる。墮落した人間と墮落した天使たちは、神の廃位のために結託していた。

こうして、この世の賢人たちは科学と自然の定まった法則について語り、これらの法則の逸脱はありえず、ノアのメッセージが真実ではありえないと宣言した。ノアの時代の才能ある人々は自ら神のみ旨とご目的に敵対して同盟を組み、神がつかわされたメッセージと使命者を嘲った。……ノアは彼らの哲学に反論したり、いわゆる科学の主張に反論を唱えたりすることはできなかった。しかし、彼は神のみ言葉を宣布することができた。なぜなら、彼はそこに創造主の無限の知恵があることを知っていたからである。そして彼がそれをいたるところに鳴り響かせたとき、世の人が彼を冷笑と軽蔑をもって扱ったからと

いて、その力や現実性を少しも失うことはなかった。

ノアは自分のメッセージに、サタンのやわらかく喜ばせるような欺瞞を混ぜなかった。神は非常に憐れみ深いので、そのような恐ろしい働きをなすことはおできにならないと宣言していた当時の多くの人々の言葉を彼が口にするとはなかった。多くの人々は神が悪人たちに別の恩恵期間をお与えになると断言した。しかし、ノアは彼らに、現在の機会をなおざりにする人々、現在のメッセージを拒む人々に救いのもう一度の機会という恩恵が与えられる希望を少しも与えなかった。……彼は神の力を知っており、神がご自分のみ言葉を成就なさることを悟っていた。彼の神への恐れは、彼を神から引き離すのではなく、彼をますます神に近づけ、彼が自分の魂を真剣な嘆願のうちに注ぎ出すよう導いた。(サイン・オブ・タイムズ 1895年4月18日)

11月6日

アブラハムの質問しない従順

「時に主はアブラムに言われた、『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。』」
(創世記 12:1, 2)

神はアブラハムを世に光を伝達するご自分の使命者として選ばれた。神のみ言葉が彼に及んだ。そこにはこの世の生涯における多額の給与や偉大な評価や世俗的な誉れの展望で嬉しがらせるような提示はなかった。「あなたは国を出て、……わたしが示す地に行きなさい」というのがアブラハムへの神聖なメッセージであった。父祖は従い、神の光を担う者として、このお方のみ名を地で生かし保つために、「それに従い、行く先を知らないで出て行った」。彼は自分の国を捨て、家庭を捨て、親族を捨て、自分の地上生活につながるすべての快適な交わりを捨て、旅人となり寄留者となった。……神が彼をお用いになることができる前に、アブラハムはかつての交わりから分離しなければならなかった。それは彼が人間の感化力によって支配されることなく、人間の援助に頼ることがないためであった。いまや彼は神につながるようになり、この人は今後寄留者のうちに宿らなければならなかった。彼の品性は全世界と異なる特別なものとならなければならなかった。彼は自分の友人たちに理解されるように、自分の一連の行動を説明することすらできなかった。なぜなら、彼らが偶像礼拝者だったからである。霊的な事柄は霊的に判断されるべきである。そのため、彼の動機や彼の行動は、彼の親族や友人たちの理解を越えていた。

アブラハムの質問しない従順は、聖なる記録のうちに見出される神への信仰と依存のもっとも顕著な例のひとつであった。彼の子孫がカナンを所有する

よくなるという約束一つで、わずかな外面的証拠もなく、彼は神が導かれるところへ従って行き、自分の側で完全に真心から条件に従い、主がご自分のみ言葉を忠実に果たして下さることを確信していた。父祖は神が自分の義務を示唆される場所へ行った。彼は恐れることなく荒野を通っていった。彼は一つのことだけを考えて、偶像礼拝国家の間を行って、「神が語られたのだ。わたしはこのお方のみ声に従っている。このお方が導き、このお方がわたしを保護して下さい」。

まさにアブラハムが持っていたような信仰と確信を今日神の使命者たちは必要としている。しかし、主がお用いになることのできたはずの多くの人々は他のすべてに勝る一つのみ声に聞き従って、前進しないのである。……主はもしご自分の僕たちが、このお方の奉仕を親族や地上のあらゆる交わりのぎずなにまさるものと考えて、完全にこのお方に献身するならば、彼らのためにもっと多くのことがおできになる。(教会への証 4 巻 523, 524)

11月7日

アブラハムの揺るがない信仰

「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて……行き、……彼を燔祭としてささげなさい。」(創世記 22:2)

主は最も恐るべき試練によってアブラハムの信仰を試されるのが適切だと思われた。もし彼が最初のテストに耐えて、忍耐よく約束がサラに成就するのを待って、ハガルを自分の妻として受け入れていなければ、かつて人間に要求された中でもっとも厳しいテストに服することはなかったであろう。主はアブラハムに次のようにお命じになった、「あなたの愛する……子……を連れてモリヤの地に行き、……山で彼を燔祭としてささげなさい」。……

アブラハムは神を信じないこともためらうこともせず、早朝に二人の僕と彼のむすこイサクを連れ、燔祭のためのたぎぎもって神が自分に命じられた場所へ向かった。……アブラハムは親の気持ち自分が支配し、神に対して反逆するよう導くことを許さなかった。神のご命令は、彼の魂の深みまでかきたるように意図されていた。「今あなたのむすこを連れていきなさい」。そしてあたかも心をもう少し深く調べるかのように、このお方は次のように付け加えられた。「あなたの愛するひとり子イサク」、つまり約束のひとり子である「彼を……ささげなさい」。……

三日間、この父親は自分の息子と旅をして、彼が疑おうと思えば理論的に考え、疑う十分な時間があつた。しかし、彼は神を信頼しないようなことはしなかった。……

アブラハムはイサクが約束の息子であることを信じた。彼はまた神が彼を燔祭として捧げるようにお命じになったとき、言葉どおりを意味しておられることを信じた。彼は……神がご自分のみ摂理のうちに、年老いたサラに息子を与え、また彼に自分のむすこの命をとるようにお命じになった神がまた、……イサク

を死人の中からよみがえらせることができになることを信じた。

アブラハムは僕を途中に残し、自分のむすこだけ少し離れたところで礼拝することを申し出た。……この断固とした、愛し、苦しんでいる父親は、むすこをかたわらにしてしっかりと歩み続けた。彼らが、神がアブラハムに指示された場所へ来ると、彼はそこに祭壇をつくり、きちんとたきぎを置いて燔祭の準備をし、それからイサクに彼を燔祭としてささげるようにとの神のご命令を伝えた。彼は神が幾度も自分に繰り返された約束を繰り返した。すなわちイサクを通して彼が偉大な国家となること、そして彼をほふるようにとの神のご命令を果たすことによって、神がご自分の約束を果たして下さるのであった。
……

イサクは神を信じた。……彼は、やさしく父親と抱きあってから、言われるがままにしばられてたきぎの上にのせられた。いよいよアブラハムが手をふりあげて、むすこを殺そうとすると、……ずっとアブラハムの忠誠を見守っていた神の天使が、天から呼びかけて、「アブラハムよ、……わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」と言った。(生き残る人々 97～100)

11月8日

ヨセフは神に真実であることを決心した

「ヨセフは〔自分の兄弟たち〕に言った、『恐れることはありません。……あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて、……多くの民の命を救おうと計られました。』」（創世記 50:19, 20）

ヨセフは、売られた隊商につれられてエジプトに向かった。……ヨセフは遠方に父の天幕が張ってある山を見ることができた。彼は愛する父親のさびしさと苦しさを察して激しく泣いた。ふたたびドタンで起こったことを思い出した。彼は兄弟たちの怒りを見、彼らの恐ろしい目つきを身に感じた。泣き叫んで訴える彼に浴びせられた鋭いぶべつの言葉が彼の耳に鳴っていた。彼は将来のことを考えて恐れおののいた。たいせつに扱われたむすこから、いやしい無力な奴隷になるとはなんとという変わりようであろう。ただひとり、友もなく異国に連れられていく彼の運命はどうなることであろうか。ヨセフは、しばし悲哀と恐怖の念にかられて気が狂いそうであった。

しかし、神の摂理のうちに、このような経験さえも祝福になるのであった。ヨセフはわずかの時間のうちに、数年かかっても得られない教訓を学んだ。彼の父は、強くやさしい愛の人であったが、彼を特別に愛してあまやかしたことは彼のためにならなかった。この愚かな偏愛は兄弟たちを怒らせ、彼らに残虐行為を行なわせ、ヨセフを家庭から引き離す原因になった。その影響は、彼自身の品性にもあらわれていた。彼は、これまでに助長された欠点を改める必要があった。彼はうぬぼれの強い苛酷な人間になりつつあった。彼は、父親のやさしい保護になれていたので、前途の困難と、異国人また奴隷としてのきびしい、だれの保護もない生活になんの準備もないことを感じた。……

そのとき彼は、父の神のことを考えた。彼は幼いときから、神を愛し恐れることを教えられていた。彼は父の天幕の中で、ヤコブが逃亡者となって家を

脱出したときに見た幻の話をよく聞いたものであった。彼はヤコブに与えられた主の約束とそれが成就した方法、すなわち、父が最も必要に迫られたときに、神の天使が現われて彼を教え、慰め、保護したことを教えられていた。また、彼は、人間のために贖い主を与えられた神の愛について学んでいた。彼は今、こうした尊い教訓をまざまざと思い出した。ヨセフは、先祖の神が自分の神であることを信じた。彼はその時その場所で自分を全く主にささげ、イスラエルを守るものが、流浪の地で彼と共にいてくださるよう祈った。

彼はどのような環境のもとにあっても、天の王の臣民らしく行動し、神に忠誠を尽くそうと決心して大きな感動をおぼえた。彼は、専心、主に仕えようと思った。……この一日の経験が、ヨセフの生涯の分岐点になった。その恐ろしい不幸が、あまやかされた少年から、思慮深く、勇敢で沈着なおとなに彼を変えたのである。(人類のあけぼの上巻 234, 235)

11月9日

モーセに及んだヨケベデの感化力

「信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び」（ヘブル 11:24, 25）

モーセが家庭の暖かい保護から離れたのは、ヨセフやダニエルよりも年少の時であった。しかしこのときすでに、ヨセフやダニエルの一生を形づくったのと同じ力によって、彼の一生は形づくられていた。モーセがヘブルの肉親と共に暮らしたのはわずかに十二年にすぎなかったが、この年月の間に、彼の偉大さの基礎が築かれたのであった。しかもそれは、世に名も知られない者の手によって築かれたのであった。

ヨケベデは奴隷の女であった。彼女の身分は卑しく、その重荷は大きかった。しかし世はヨケベデを通して与えられたほどの大きな祝福を、ナザレのマリヤを除いては、他のどんな女からも受けたことはない。彼女は、子供がまもなく自分の手を離れて、神を知らない人々の手で育てられなければならないことを知って、ますます熱心に、その子の魂を天に結びつけようと努力した。彼女は幼いモーセの心に、神に対する愛と忠誠心を植えつけようとした。そして、この働きは、忠実になし遂げられた。モーセは、後年どんな影響をうけても、母親が一生の重荷として自分に教えさとしてくれた真理の原則から離れることがなかった。

ヨケベデのむすこモーセは、ゴセンの貧しい家庭から、パロの宮殿にひきとられ、エジプト王女のいとし子として迎えられた。モーセは、エジプトの学校で、最高の文武の教育を受けた。モーセのりっぱな容貌や体格から受ける容姿の大きな魅力、教養をつんだ知性と貴公子然たる態度、武官としての盛名—そうしたことのために彼はエジプト国民の誇りとなった。エジプト王は、祭司職の

一員でもあったので、モーセは、異教の神の礼拝にあずかることを拒んではいたが、エジプトの宗教の奥義のいっさいを伝授された。

その当時はまだ、エジプトは、国々の中で、最も勢力があり、また最も高い文明を保っていたので、モーセは、その未来の君主として、この世で与えられるかぎり最高の栄誉を継ぐ者であった。しかし彼の選択は、それよりももっと貴重な選択であった。モーセは、神の栄えと、踏みつけられているイスラエル人の救済のために、エジプトの栄誉を犠牲にした。そのとき、神は、特別な意味において、モーセの教育を引き受けられたのであった。……

彼は、神の力に信頼することについて、教訓を学ばなければならなかった。彼は神の御目的を誤解していた。……ミデアンの荒野にモーセは牧羊者として四十年の年月をすごした。……彼は、イスラエルの忠実な忍耐強い牧者となるのに必要な経験を得なければならなかった。神の代表者となるためには、自ら神について知らなければならなかった。……

荘厳な威容を誇る山々にかこまれた人跡まれな場所にあつて、モーセはただひとり神と交わった。……ここで彼の自己満足の念はあとかたもなく消えうせた。(教育 59, 60)

エジプトの偉大さは滅び……た。しかし、モーセの業績は決して滅びることなく、彼が自らの生活に実行した正義の大原則は永遠に不滅である。(教育 67)

11月10日

モーセの指導力は確信をいだかせた

「バシヤンの王オグは、われわれを迎え撃とうとして、その民をことごとく率い、出てきてエデレイで戦った。時に主はわたしに言われた、……『彼を恐れてはならない。わたしは彼と、そのすべての民と、その地をおまえの手に渡している。……われわれはこれを撃ち殺して、ひとりをも残さなかった。』（申命記 3:1-3）

彼ら（〔イスラエル人〕）の前には、強力で人口も多いバシヤン王国があった。……そこは、今日も世界の驚異となっている大きな石造りの町が群がっていた。家々は巨大な黒い石で造られ、その時代にそれを攻めるために用いられたどんな武力に対しても絶対に動かされないほどの巨大なものであった。その国土は、天然の洞穴、大絶壁、大きく開いた裂け目、岩の要塞にみちていた。この国の住民は、巨人族の子孫であって、驚くほど大きく、力が強かった。また、暴力と残酷さは、はなはだしく、周囲のすべての国々から恐れられていた。国王オグは、巨人の国においてさえ、体格と武勇にきわだった存在であった。

しかし、雲の柱は前へ進んだ。その導きに従ってヘブルの軍勢はエデレイに進んだ。そこに巨人の王は、軍勢を従えて彼らの近づくのを待っていた。オグは巧妙に戦いの場所を選んだ。エデレイの町は平原が急に高くなった高地のはずれにあつて、でこぼこの火山岩でおおわれていた。そこに登るには、狭い曲がりくねった登りにくい道があるだけであった。……

ヘブル人が、その軍勢の中でもきわ立つ巨人中の巨人の雄姿を見、また、彼をとりまく軍勢を見、背後に幾千の軍勢をひかえた、一見、難攻不落のようなとりでを見たとき、イスラエルの多数のものの心は恐れで動揺した。しかし、モーセは冷静で落ちついていた。それは、主がバシヤンの王についてこう言われたからである。「彼を恐れてはならない。わたしは彼と、そのすべての民と、その地をおまえの手に渡している。おまえはヘシボンに住んでいたアモリびと

の王シホンにしたように、彼にするであろう」(同 3:2)。

指導者の冷静な信仰は民の心に神に対する確信をいだかせた。彼らは、主の全能のみ腕にすべてをゆだねた。そして主は彼らを見捨てられなかった。強力な巨人も、城壁のある町々も、武装した軍勢も、岩のとりでも、主の軍勢の将の前に立つことはできなかった。主は、軍を導かれた。主は、敵を散らされた。主は、イスラエルに勝利をもたらされた。巨人の王とその軍勢は敗北した。イスラエル人は、まもなく、その全土を手中におさめた。……。パシヤンの軍勢は、雲の柱の中に秘められた不思議な力の前に降伏し……た。(人類のあけぼの下巻 40～44)

どのように恐ろしく見え、心を恐怖で満たすような困難でも、けんそんに、神に信頼して服従の道を前進するときに消え去るのである。(同上 43)

11月11日

バラクを支えたデボラ

「イスラエルには農民が絶え……だが、デボラよ、ついにあなたは……立ってイスラエルの母となった。人々が新しい神々を選んだとき、戦いは門に及んだ。イスラエルの四万人のうちに、盾あるいは槍の見られたことがあったか。」(士師記 5:7, 8)

二十年の間、イスラエルは压制者のくびきの下で苦悶の声をあげていた。その後、彼らは自分たちの偶像礼拝に背を向け、へりくだりと悔い改めをもって救出を求めて主に呼ばわった。彼らの叫びはむだではなかった。イスラエルのうちに敬神のすぐれた女性があり、彼女を通して主はご自分の民を救出することを選ばれた。彼女の名はデボラであった。彼女は女預言者として知られており、通常の判事の不在時には、人々は彼女に勧告と判断を仰いでいた。

主はデボラにイスラエルの敵を滅ぼすご自分の目的を伝え、彼女にバラクという人のところへ人を遣わし、……彼に彼女の受けた指示を知らせるようにとお命じになった。彼女はそれに従ってバラクに人を遣わし、彼に一万人をナフタリとゼブルンの部族から集め、ヤビン王の軍勢と戦うように指示した。

バラクは散らされ、落胆し、武装していないヘブル人の状態、また彼らの敵の強さと手腕を知っていた。彼は主ご自身からイスラエルを救出するために選ばれた者として指定され、また神が彼と共にいて彼らの敵を征服なさるといふ保証を受けていたが、なお臆病で信用しなかった。彼はデボラからのメッセージを神の言葉として受け入れたが、イスラエルにはほとんど信頼しておらず、彼らが自分の召しに従わないのではないかと恐れた。彼はデボラが彼と共に行き、それによって彼女が感化力と勧告をもって彼の努力を援助しないかぎり、そのような疑わしい仕事を引き受けることを拒んだ。……

バラクは主が指示された通り、一万人の軍勢を終結し、タボル山へと進軍

した。シセラはすぐにおびたしい数のよく武装した軍勢を集め、ヘブル人を囲んで格好の餌食にしようと待ち構えていた。イスラエル人は……自分たちの眼下の平原に広がる巨大な軍勢が戦争のあらゆる装備を備えているのを見て恐れた。……大きな鎌のようなナイフが取り付けられており、そのために馬車が敵陣の中を突っ切ると、彼らを鎌の前の小麦のように切り倒してしまうのであった。

イスラエル人は自ら山々の間の強力な位置に駐屯し、攻撃のための好機を待っていた。その日に著しい勝利がもたらされるというデボラの保証に励まされて、バラクは自分の軍勢を平原へと導き下り、大胆に敵へ向かって突撃した。戦闘の神がイスラエルのために戦われ、戦争における技能でもなく、数や装備に勝っていたからでもなく、彼らに抵抗することができた。シセラの軍勢はパニックに陥った。……神だけが敵を当惑させることがおできになったのであり、勝利はただこのお方によってのみもたらされたのであった。(サィズ・オブ・タムズ 1881年6月16日)

11月12日

ギデオンは三百人を勝利へと導いた

「主はふり向いて彼に言われた、『あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか。』」（士師記 6:14）

ギデオンは、マナセの部族のヨアシの子であった。この家族の属した家系は指導的位置にはなかったが、ヨアシの家族は勇気と誠実との点で頭角をあらわしていた。……ギデオンに、人々を救えという神の召しが与えられた。……

すると突然、「主の使」が現われて、彼に言った。「大勇士よ、主はあなたと共におられます」。

彼は答えた。「ああ、君よ、主がわたしたちと共におられるならば、どうしてこれらの事がわたしたちに臨んだのでしょうか。」……天からの使者は答えた。「あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか」……

ギデオンのもとに集まった全軍は、わずか三万二千人であった。しかし、敵の大軍を前にして、主は彼に言われた。「あなたと共にいる民はあまりに多い。ゆえにわたしは彼らの手にミデアンびとをわたさない。おそらくイスラエルはわたしに向かってみずから誇り、「わたしは自身の手で自分を救ったのだ」と言うであろう。それゆえ、民の耳に触れ示して、「だれでも恐れおののく者は帰れ」と言いなさい。……

ギデオンは、主の指示に従った。彼は、全軍の三分の二以上の二万二千人が家に帰るのを見て、非常に心を痛めた。ふたたび、主の言葉が彼に与えられた。『民はまだ多い。彼らを導いて水ぎわに下りなさい。わたしはそこで、あなたのために彼らを試みよう。……進みながら手で水をすくって、急いで水を

飲んだ者がわずかながらいたが、大部分は、ひざをかがめて、水面に口をあててゆっくり飲んだ。手を口にあてて水を飲んだ者の数は、一万人のうちわずかに三百人であった。けれども彼らを選ばれて、残りの者はみな、家に帰ることを許された。品性は、ごく簡単な方法で試みられるものである。……

三百人は、勇気と自制があるばかりか信仰の人であった。……神は、彼らを導く……ことがおできであった。……

夜陰に乗じて、ギデオンのラッパを合図に、三組はラッパを吹き鳴らした。そしてつばを打ち砕いて燃えさかるたいまつを出し、「主のためのつるぎ、ギデオンのためのつるぎ」というときの声をあげて、敵に突進した。……侵入軍は十二万人以上の戦死者を出した。……彼らがどんなに簡単な方法で、勇ましい好戦的民族に勝ったかということを知ったときに、回りの国々のいだいた恐怖は言葉では尽くせない。(人類のあけぼの下巻 192～199)

11月13日

ギデオンはエフライム人に 礼儀をあらわした

「『神はミデアンの君オレブとゼエブをあなたがたの手にわたされました。わたしのなし得た事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか』。ギデオンがこの言葉を述べると、彼らの憤りは解けた。」(士師記 8:3)

ギデオンが、国の敵の追跡を終えて帰ってくると、自国民の非難と譴責が彼を待っていた。彼が、ミデアン人と戦うためにイスラエルの人々に呼びかけたときに、エフライムの部族は出てこなかった。彼らは、そのような企ては危険だと考えた。そして、ギデオンは、彼らを特別に召集しなかったので、彼らはそれをよいことにして兄弟たちに加わらなかった。しかし、イスラエルの勝利の知らせが彼らのところにとどいたとき、エフライムの人々は、自分たちが参加していなかったので彼らをねたんだ。

ミデアン人を追放したあとで、エフライムの人々は、ギデオンの指示のもとにヨルダンの渡しを占領し、彼らが逃げるのを防いだ。こうして、多数の敵が殺されその中には、オレブとゼエブというふたりの君がいた。こうして、エフライムの人々は、戦いのあと始末をして勝利の完成に貢献した。しかし、彼らはねたんで怒った。彼らは、ギデオンが自分の意志と判断で行なったものと思った。彼らは、イスラエルの勝利のうちに神のみ手を認めず、神の力とあわれみによって自分たちが救われたことを感謝しなかった。……

彼らは、戦利品を携えて帰ってきて、怒ってギデオンを責めた。「あなたが、ミデアンびとと戦うために行かれたとき、われわれを呼ばれなかったが、どうしてそういうことをされたのですか」。

ギデオンは彼らに言った。「今わたしのした事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか。エフライムの拾い集めた取り残りのぶどうはアビエゼ

ルの収穫したぶどうにもまさるではありませんか。神はミデアンの君オレブとゼエブをあなたがたの手にわたされました。わたしのなし得た事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか」(同 8:2, 3)。

ねたみの精神は、とかく、あおり立てられると争いを起こし、争鬪と流血の原因になりやすい。しかし、ギデオンのけんそんな答えが、エフライムの男たちの怒りをしずめた。そして、彼らは心を和らげて家へ帰った。ギデオンは、原則に関しては堅く立って妥協せず、戦いに出ては、「大勇士」であったが、また、まれに見る思いやりの精神を表わした。

イスラエルの人々は、ミデアン人から救い出されたことを感謝して、ギデオンが彼らの王となり、彼の子孫が代々王となることにしようと申し出た。この申し出は、神政政治の原則とは全く正反対のものであった。神がイスラエルの王であられた。であるから、彼らが人間を王座につけることは、彼らの王であられる神を拒むことになる。ギデオンは、この事実を認めた。彼の返答は、その動機がいかにも真実で気高いものであったかを示した。わたしはあなたがたを治めることはいたしません。またわたしの子もあなたがたを治めてはなりません。主があなたがたを治められます」と彼は言った。(人類のあけぼの下巻 200～202)

11月14日

アビガイルは無我と知恵を表す

「アビガイルはダビデを見て、急いで、……ダビデの前で地にひれ伏し、その足もとに伏して言った、『わが君よ、このとがをわたしだけに負わせてください。』（サムエル記上 25:23, 24) 」

ダビデとその従者たちは、……ナバルという名の非常に裕福でカルメル地方で莫大な財産を持っていた人の群れや家畜を略奪者から守った。ナバルはカルレブの子孫であったが、その品性は粗野で卑しかった。

ダビデとその従者はこの地方にいた間、非常な食料の欠乏状態にあったので、エッサイのむすこはナバルが羊の毛を刈っていることを聞くと十人の若者をナバルにつかわし、「十人の若者をつかわし、その若者たちに言った、カルメルに上って行ってナバルの所へ行き、わたしの名をもって彼にあいさつしなさい。……

ダビデと彼の部下たちは、ナバルの羊飼いと群れが山々の間にいた間、彼らにとっては、防壁のようなものであった。そして彼は彼らが非常に困窮しているときに、この裕福な男の豊かな富の中から食料を供給してくれるようにと礼儀をもって嘆願した。……「ナバルはダビデの若者たちに答えて言った、ダビデとはだれか。エッサイの子とはだれか。……どうしてわたしのパンと水、またわたしの羊の毛を切る人々のためにほふった肉をとって、どこからきたのかわからない人々に与えることができようか」。

若者たちが何も持たずに帰ってきて、失望し、うんざりして、この話をしたときに、ダビデは憤りに満ちた。……彼は、部下の者に自分たちの剣を身に帯び、戦いの用意をすることを命じた。……

ナバルのしもべのひとりが、ナバルの妻アビガイルのもとへ急ぎ……何が起こったかを話した。……

アビガイルは、夫に相談もしなければ、自分が何をしようとしているかを知らせもせず、十分な食糧をろばに載せて、ダビデの一隊に会うために出発した。彼女は、山の陰で彼らに出会った。「アビガイルはダビデを見て、急いで、……ダビデの前で地にひれ伏し、その足もとに伏して言った、『わが君よ、このとがをわたしだけに負わせてください。しかしどうぞ、はしために、あなたの耳に語ることを許し、はしための言葉をお聞きください』」。アビガイルは、王に語るようにうやうやしい態度でダビデに語った。……

彼女はやさしく語って、彼の怒りをなだめた。……まったくの無我の精神をもって、彼女は彼にこの事態のすべての責めを、彼女の哀れな思い違いをしている夫にではなく、自分に帰してほしいと願った。……

これはなんという精神であろう！なんの誇示やほこりもなく、神の知恵と愛に満ちて、アビガイルは自分の家族に対する献身の力を表した。彼女の夫の気質がどんなものであろうと、彼はなお彼女の夫であり、彼女は憤っている軍の長に、自分の夫の不親切な行動が、彼を個人的に侮辱しようと思ってしたことではないことを明らかにした。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1888年10月26日)

11月15日

アビガイルの感化力が 悲劇を防いだ

「ダビデはアビガイルに言った、『きょう、あなたをつかわして、わたしを迎えさせられたイスラエルの神、主はほむべきかな。あなたの知恵はほむべきかな。またあなたはほむべきかな。あなたは、きょう、わたしがきて血を流し、手ずからあだを報いることをとどめられたのです。』」（サムエル記上 25:32, 33）

アビガイルの敬神の念は、花のかおりのように、顔や言葉や行動に、無意識のうちにただよっていた。神のみ子の霊が、彼女の心に宿っていた。彼女の心は純潔と優しさと聖化された愛に満たされていた。彼女の言葉は、恵みによって味つけられ、親切と平和に満ち、天の感化を及ぼしていた。ダビデは、われに返り、自分の早まった考えがどんな結果をもたらすものであったかを思って戦慄した。アビガイルのような善のために祝福された働きにたずさわった神をおそれる尊い人物がいる家族が全員殺されていたかもしれなかった。彼女の言葉はダビデの痛み傷ついた心を癒した。

いらだった感情を和らげ、早まった衝動をとどめ、冷静さと正しい知恵の言葉によって、大きな悪をしずめようとした女が、もっと多くあればどんなによいことであろう。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」。

献身したクリスチャンの生活は、常に光と慰安と平安を放っている。それは、純潔、気転、単純、有用性などの特性を持っている。それは、感化力を清める無我の愛に支配されている。それは、キリストに満ち満ちていてその人が行くところは、どこにでも、光の足跡を残すのである。アビガイルは、賢明な譴責者であり、勧告者であった。ダビデの怒りは、彼女の感化と道理にかなった話しぶりによっておさまった。彼は、自分が賢明でない行動をとり、自制を

失ったことを自覚した。彼は、へりくだって譴責を受け入れた。……彼女が彼に正しい勧告を与えたために、彼は感謝して祝福した。

譴責される場合に、腹を立てずに譴責を受け入れるならば、賞賛に値すると考えている人が多い。しかし、感謝の気持ちを持って譴責を受け入れ、自分を誤った道から救おうとした人を祝福する人はなんと少ないことであろう。

アビガイルは自分の任務が成功し、自分の家族を死から救う器となったことを喜んだ。ダビデは彼女の折にかなった勧告を通して、自分が暴力と復讐の行為を犯すことから守られたことを喜んだ。反省しながら、彼はそれが彼にとってイスラエルの前に恥辱の事態となったはずであること、またその記憶がいつまでも彼に最もするどい後悔の念を引き起こしたはずであることを悟った。彼は彼とその従者には感謝すべき大きな理由があると感じた。……

ダビデはナバルの死の知らせを聞いたとき、神がご自身の手で報復されたことを感謝した。(サインズ・オブ・タイムズ 1888年10月26日)

11月16日

ダビデは困難を通して学んだ

「こうしてダビデはイスラエルの全地を治め、そのすべての民に正義と公平を行った。」(サムエル記下 8:15)

「大いなる王の都」(詩篇 42:2) エルサレムの南方、数マイル離れたところにベツレヘムがある。幼子イエスが飼い葉おけに寝かされ、東方から来た博士たちの礼拝を受けられたときから、千年以上もさかのぼった昔、ここでエッサイの子ダビデが生まれた。救い主降誕の何世紀も前に、活気に満ちた少年ダビデは、ベツレヘムのまわりの山々で、草を食べる羊の番をしていた。純朴な羊飼いの少年は、自分の作った歌をうたい、その新鮮で若々しい歌の調べに合わせてたて琴をかきならすのであった。主は、ダビデを選び、羊飼いの孤独な生活の中にあつて、後年彼にゆだねようと計画された任務に対する準備をさせておられた。(人類のあけぼの下巻 310)

ダビデは少年時代からサウルと親しく交わり、宮廷で、王家の人々と接していたために、王者のきらびやかさと、はなやかさの中にかくされている苦悩や悲しみや複雑さを見ぬいていた。彼は、人間の栄誉が魂に平安を与えることには何の価値もないものであることを悟った。そして王の宮廷から牧場の羊の群れにもどったときに、彼は安心し、そして喜んだ。

サウル王のねたみのために、追われて荒野に逃げたダビデは、人間の助けから切り離されて、ますます深く神により頼むことを学んだ。荒野の生活は不安で落ちつきがなく、たえず危険に迫られ、幾度となく逃げ出さなければならず、しかもそのダビデのもとに集まって来るのは、「しえたげられている人々、負債のある人々、心に不満のある人々」などといったような性格の人々ばかりであった。こうしたすべてのことのために、彼にとってきびしい自己鍛練がますます必要であった。

これらの経験によって人を取り扱う能力やしいたげられる者への同情心や、不正への憎しみがダビデの中にめざめて成長した。待望と危険の幾年間を通じて、ダビデは慰めと支持と生命を、神の中に見いだすことを学んだ。彼は、神の力によってのみ王位にふさわしい者となり、神の知恵によってのみ賢明に統治し得るということを知った。ダビデが「そのすべての民に正義と公平を行った」という記録を残すことができたのは、一もつともそれは後になって、大きな罪のために傷つけられはしたが、一困難と苦悩という学校で受けた訓練の賜物であった。(教育 170,171)

彼を感動させた愛、彼を悩ました悲哀、彼の得た勝利などは、みな、彼の活発な心の主題であった。そして、彼が自分の生涯のすべての摂理の中に、神の愛をながめたと、彼の心は熱烈な賛美の感謝に脈打ち、彼の口からはさらに美しい旋律が流れ、たて琴は歓喜にあふれてかきならされた。こうして、羊飼いの少年は、力から力へ、知識から知識へと進んでいった。それは、神の霊が彼と共におられたからである。(人類のあけぼの下巻 314, 315)

11月17日

ソロモンは苦難から学ぶ

「『わが神、主よ、あなたはこのしもべを、わたしの父ダビデに代って王とならせられました。しかし、わたしは小さい子供であって、出入りすることを知りません。……それゆえ、聞きわける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてください。』」（列王記 3:7～9）

ソロモンは、ダビデとちがって、若い時から鍛練されるという経験を持たなかった。彼は境遇においても品性においても生活においても、他のだれよりも恵まれていた。高貴な身分に生まれて成人し、神に愛されたソロモンは、繁栄と栄誉を約束された統治の位についた。諸国の民は、神が知恵をお与えになったソロモンの知識と洞察力に驚嘆した。しかし繁栄の誇りはやがて神からの離反をもたらした。神と交わる喜びから離れて、ソロモンは官能の快樂に満足をもとめた。この経験について、彼はこう言っている。

「わたしは大きな事業をした。わたしは自分のために家を建て、ぶどう畑を設け、園と庭をつくり、……わたしは男女の奴隷を買った。……わたしはまた銀と金を集め、王たちと国々の財宝を集めた。またわたしは歌うたう男、歌うたう女を得た。また人の子の楽しみとするそばめを多く得た。こうして、わたしは大いなる者となり、わたしより先にエルサレムにいたすべての者よりも、大いなる者となった。……なんでもわたしの目の好むものは遠慮せず、わたしの心の喜ぶものは拒まなかった。わたしの心がわたしのすべての労苦によって、快樂を得たからである。……」

そこで、わたしはわが手のなしたすべての事、およびそれをなすに要した労苦を顧みるとき、見よ、皆、空であって、風を捕えるようなものであった。日の下には益となるものはないのである。わたしはまた、身をめぐらして、知恵と、狂気と、愚痴とを見た。そもそも、王の後に来る人は何をなし得ようか。すで

に彼がなした事にすぎないのだ。……」(伝道の書 2:4～12)

「わたしは生きることをいとった。……わたしは日の下で労したすべての労苦を憎んだ。」(17, 18 節)

ソロモンは自分のにがい経験を通して、物質に最高の幸福を求める人生がどんなに空虚なものであるかを知った。……

晩年になって、疲れ果てたソロモンは、この世のこわれた水おけにかわきをいやすことができなくなって生命の泉に水をもとめて立ち帰った。彼は聖霊の感動によって後世の人々のために、自分のむなしく過ごした年月の歴史を警告の戒めとともに書きしるした。こうして、ソロモンのまいた種は、悪の収穫となってイスラエルの民に刈りとられたが、しかし彼の一生の働きは全く減びてしまったわけではなかった。苦難の鍛練が彼のために、ついに効果をあらわしたのであった。

しかし苦難というものが人々の一生に教えている人生の教訓を、もしソロモンが若い時から学んでいたなら、あのような輝かしい人生の出発をした彼の人生の真盛りは、どんなに光輝に満ちたものとなったことであろう。(教育 171～173)

11月18日

エリシャは堅実さを表す

「エリヤはまた彼〔エリシャ〕に言った、『どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをヨルダンにつかわされるのですから』。しかし彼は言った、『主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません』。そしてふたりは進んで行った。」(列王記 2:6)

預言者エリシャは、その幼年時代を静かないなかの生活の中で、神と自然に教えられ、有用な働きをしこまれて育った。彼の父の家族は、当時ほとんど全国的な背教の中にあつて、バアルにひびを屈しなかつた一部の人々の仲間であつた。その家庭は神をあがめ義務を忠実に果たすことを日常生活の法則としている家庭であつた。

富裕な農夫のむすこエリシャは、最も手近なところから働きをはじめた。人々の指導者となる素質をもっていた彼は、まず日常の平凡な義務について訓練をうけた。人を賢明に導くためには、自ら人に従うことを学ばなければならなかつた。小さなことに忠実であることによって、彼はいつそう重い責任をになうのにふさわしい者となつた。エリシャは、柔和でやさしい精神を持っている半面にまた精力と強固な意志を持っていた。彼は、神を愛しおそれる念を胸にいだいていた。そして毎日平凡な仕事をくりかえしているうちに、確固たる目的ととうとい品性を身につけ、神の恩恵と知識の中に成長した。彼は、家事に父と協力している間に神と協力することを学んだ。

エリシャが預言者として召されたのは、彼が父の下男たちといっしょに畑を耕していたときであつた。神の導きをうけて後継者をさがしていたエリヤが、この若者の肩に外套をなげかけたとき、エリシャは召命を認めてこれに従つた。彼は、「立つて行ってエリヤに従い、彼に仕えた」と記録されている。最初エリシャに命じられた働きはたいしたものではなかつた。相変わらず平凡な義務が

彼の訓練の本質であった。彼は、主人エリヤの手に水を注ぐ者であったと言われている。エリシャは、預言者エリヤの身边に付き添う従者として、小さなことに忠誠をつづけた。同時にまた日々が強まる目的をもって、神から命じられた任務に献身した。……

彼がエリヤについて行こうとすると、家に帰れと預言者から命じられた。彼は、価をかぞえてみなければならなかった。すなわち召命をうけ入れるか、拒むかを自分できめなければならなかった。しかし、エリシャは、その機会がどんな価値をもっているかを理解した。彼は、世俗的な利益のために、神の使者となる機会をのがしたり、神のしもべエリヤと交わる特権を犠牲にしたりしようとは思わなかった。

時がたって、エリヤが天に上げられる準備ができるとともに、エリシャはその後継者となる準備ができた。そこで再びエリシャの信仰と決心が試みられた。エリシャは、エリヤの巡回伝道についてまわり、……その行くさきぎぎで、エリヤからひきかえすように勧められた。……引き返すように勧められるたびに彼の答えは、「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」であった(列王記下 2:2)。……この働きのために、エリシャは、若い時から神の導きのもとに訓練をうけ、準備されていた。(教育 55 ~ 58)

11月19日

捕虜の少女が ナアマンのために氣遣いを表す

「スリヤびとが……イスラエルの地からひとりの少女を捕えて行った。彼女はナアマンの妻に仕えたが、その女主人にむかって、『ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかったです。彼はそのらい病をいやしたことでしょう』と言った」(列王記 5:2, 3)

「スリヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力な人であった。……彼は大勇士であったが、らい病をわずらっていた」(列王紀下 5:1)。

スリヤの王ベネハダデはイスラエルの軍勢を打ち破り、……その時以来、スリヤ人はイスラエルに対して絶えず国境付近の戦争をいどみ続けた。そして、そのような襲撃の際に、彼らはひとりの少女を連れ去った。この少女は捕らえられて行った地で「ナアマンの妻に仕えた」。この少女は家庭から遠く離れた奴隷であったけれども、神の証人のひとり、神がご自分の民としてイスラエルを選ばれた目的を無意識のうちに達成したのである。

彼女がその異教の家庭で仕えていたときに、彼女の主人を気の毒に思った。そして、エリシャが行った驚くべきいやしの奇跡を思い出して、その女主人に向かって、「ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかったです。彼はそのらい病をいやしたことでしょう」と言った(同 5:3)。彼女は、エリシャには天の神の力が宿っているのを知っていた。そして、この力によってナアマンはいやされると信じたのである。

異教の家庭における捕らわれの少女の行動とその態度は、初期の家庭訓練の力を力強く証明している。父親と母親にゆだねられた任務の中で、子供の保護と訓練ほど重要なものはない。両親は習慣と品性の基礎そのものを築かなければならない。彼らの模範と教育とによって、子供たちの将来の大半

が決定されてしまうのである。

その生活が真に神を反映し、神の約束と命令が子供の中に感謝と崇敬の念を起こさせるような両親は幸福である。また、そのやさしさと正義と忍耐とが、神の愛と正義と忍耐を子供たちに解明し、彼らに対する愛と信頼と服従を教えることによって、天の神に対する愛と信頼と服従を教える両親は幸福である。このような賜物を子供に与える両親は、あらゆる時代のすべての富よりも尊い宝、永遠に至る宝を子供に授けるのである。……

このヘブルの少女の両親は、彼女に神のことを教えたときに、彼女がどんな運命をたどるかを知らなかった。しかし、彼らはゆだねられた任務に忠実であった。そして、スリヤの軍勢の長の家庭において、彼らの子供は彼女が尊ぶことを学んだ神のためのあかしを立てたのである。

ナアマンは彼女が女主人に言った言葉を聞いた。そして、王の許可を得ていやしを求めて出かけた。(国と指導者上巻 212, 213)

11月20日

イザヤは神の召しにこたえた

「わたしはまた主の言われる声を聞いた、『わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか』。その時わたしは言った、『ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください。』」（イザヤ 6:8）

ウジヤ王が死んだ年に、イザヤは幻の中で聖所の中を見ること、そして天の聖所の至聖所を見るのが許された。聖所の一番の奥の幕が引き上げられ、高く引き上げられ、あたかも天そのものにまでそびえているかのように見えた御座が彼の目の前に表された。御座におられるお方から言い表しがたい栄光が発散しており、その衣のすそが神殿に満ち、その栄光は最終的に地に満ちるのであった。恵のみ座の両側には、ケルビムがいた。……そして彼らは神のみ前から彼らを覆い隠していた栄光に輝いていた。……これらの聖なる存在は罪にけがれていない唇をもって神の賛美と栄光を歌っていた。

自分が創造主に捧げるのに慣れていた弱々しい讃美とセラピムの熱情的な讃美の対比に預言者は驚き、へりくだった。彼はしばしの間、エホバの高められたご品性のしみのない純潔さを鑑賞する崇高な特権を得た。……彼が耐えうる限り神聖なご品性の啓示をことごとくあらわしたこの比類のない光輝は、驚異的な明白さをもって、彼の前に彼自身の内なる汚れを浮き彫りにした。彼自身の言葉が汚れたものに思えた。

このように神が人類にあらわされ、神の僕が天の神の栄光を眺めることを許されるときに、彼はイスラエルの聖者の純潔をかすかに悟り、自分の聖潔を誇らしげに自慢するより、むしろ自分の魂の汚染に驚いて告白するのである。深いへりくだりのうちに、イザヤは「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者……である……のだから」。……

これは非常に多くの人が示すことを徳だと考えている自発的なへりくだりで

も卑屈な自己譴責でもない。このむなしいへりくだりの茶番は誇りと自己評価に満ちた心から生じるものである。言葉において自らを低く評価しながら、それが他の人々から賞賛や評価の表明を呼び起こさないのがっかりする人々が多くいる。しかし、預言者の自覚は本物であった。……いったい彼はどのようにして民のところへ行き、エホバの聖なるご要求を語ることができるであろう。

……

イザヤがこの最高の栄光の前で自分の不純のゆえに震え、良心を打たれていた時に、彼は次のように言った、「この時セラピムのひとりが火ばしをもって、祭壇の上から取った燃えている炭を手に携え、わたしのところに飛んできて、わたしの口に触れて言った、見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた。わたしはまた主の言われる声を聞いた、わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか。その時わたしは言った、ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」。(ビュー・アンド・ヘラルド 1888年10月16日)

11月21日

ヨハネは悔い改めを訴えた

「悔い改めよ、天国は近づいた」(マタイ 3:2)

バプテスマのヨハネは荒野の暮らしで神の教えを受けた。彼は自然の中で神の啓示を研究した。彼は神の御霊の導きの下に預言の巻物を研究した。昼も夜も思いと心と魂が栄光に満ちた光景で満たされるまで、キリストが彼の研究、彼の瞑想であった。

ヨハネは王の美しさをながめて、自分を忘れた。彼は尊厳な聖潔を見て、自分が無能力で無価値なことを感じた。彼が宣布するのは神のメッセージであった。彼は、神の力とそのお方の義のうちに立つのであった。彼は神を仰ぎ見ていたので、人をおそれることなく、天の使者として出て行く用意ができた。彼は王の王であられる神の前に低く腰をかがめていたので、地上の君主たちの面前に恐れることなくまっすぐに立つことができた。

ヨハネは入念な論拠や緻密な理論なしに、メッセージを宣布した。「悔い改めよ、天国は近づいた」という衝撃的で厳しくはあるが、希望にみちた彼の声が荒野から聞こえた。それは新しい不思議な力をもって人々を動かした。国民全体が心をかき立てられ多くの者が荒野に群がった。

周囲の地域から無学な農夫や漁師、ヘロデの兵舎からローマの兵士たち、小脇に剣をたずさえ、反乱の兆しが見えたらいつでも鎮圧しようと待ち構えている首領たち、収税所から来た強欲な取税人たち、サンヒドリンからは経札をつけた祭司たち—すべての者があたかも魔法にかかったかのように聞き入った。そしてパリサイ人やサドカイ人など冷たく心に感じない嘲笑者でさえ、冷笑は沈黙させられ、自分たちの罪の自覚に心を刺されて立ち去った。ヘロデは宮殿でそのメッセージを聞き、罪で頑なになった高慢な支配者は悔い改めへの呼びかけに震え上がった。

天の雲に乗ってこられるキリストの再臨の直前であるこの時代に、ヨハネのこのような働きがなされなければならない。神は主の大いなる日に立つべき人々を準備させる者を召しておられる。……民として……わたしたちには担うべき「あなたの神に会う備えをせよ」とのメッセージがある（アモス 4:12）。わたしたちのメッセージはヨハネのメッセージのように単刀直入でなければならない。彼は王たちをその悪のゆえに譴責した。自分の命が危険にさらされても、彼は神のみ言葉を宣言するのをためらわなかった。そして今の時代のわたしたちの働きも忠実になされなければならない。

わたしたちがヨハネが伝えたようなメッセージを伝えるためには、彼のような霊的な経験をしなければならない。わたしたちのうちに同じ働きがなされなければならない。神を見つめ、このお方を見つめるうちに、自己を見失わなければならない。ヨハネは生来人に常である欠点や弱さを持っていた。しかし神の愛が触れて彼を変えたのであった。（教会への証 8 巻 331～333）

11月22日

イエスはどのように生きるかを 示してくださった

「わたしがあわれみをこうむったのは、キリスト・イエスが、……わたしに対して(わたしのうちに) 限りない寛容を示し、そして、わたしが今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範となるためである。」(テモテ第一 1:16)

このお方〔イエス〕は教師、すなわち世がかつて見たことも聞いたこともないような教育者であられた。このお方は権威ある者のように語られたが、またすべての者を信頼するようにと招いた。「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびぎを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびぎは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(マタイ 11:28～30)。

無限の神のひとり子は、そのみ言葉と実例によって、わたしたちが模倣すべきはつきりとした模範をわたしたちに残してくださった。このお方はそのみ言葉によってわたしたちを神に従うように教育し、ご自身の実践によってわたしたちがどのように神に従うことができるかを示してくださった。これは神が一人ひとりに望んでおられる働きそのものである。すなわち、知的に神に従い、教訓と模範によって他の人々に、神の従順な子となるために何をしなければならぬかを教えるのである。

イエスをご自分の神聖な任務と働きについての知的な知識を得させるために全世界を助けられた。このお方はわたしたちの世界に御父のご品性を表すために来られた。そして、わたしたちがイエス・キリストの生涯とみ言葉と働きを研究するとき、わたしたちは神への従順という教育において、あらゆる方法で助けを得る。そしてこのお方が与えてくださった模範を手本にするとき、わた

私たちはすべての人に知られ、また読まれる生きた手紙である。わたしたちは品性においてイエス・キリストを世に表すべき生きた代理人である。

キリストはわたしたちがどのように従順な子供になることができるかを示す明白な規則をお与えになっただけでなく、ご自身の生活と品性において、神の御前に正しく受け入れられる事をどのように行うかをそのまま示してくださいだったので、このお方の目に喜ばれることをしないことについて言い訳の余地はない。……

偉大な教師は人類の頭として立ち、こうして神のご要求のすべてに対する聖なる従順によって人類を高め、聖化するために来られた。このお方は、神のすべての戒めに従うことが可能であることを示されたのであった。このお方は生涯続く従順が可能であることを証明してくださいました。このようにこのお方は、御父が御子をお与えになったように、世に対して選ばれた人間の代表者を与え、彼らの生涯のうちにイエス・キリストの生涯を例証されるのである。(原稿 1, 1892 年)

完全な理想は、キリストの中に見いだされる。われわれの到達しなければならない唯一の真の標準としてこの理想を示し、人はどういう者になり得るか、またキリストを受け入れる者は、人性に神性が宿ることによって、どういうものになるかということを示すために、キリストはこの世においでになった。人が神の子としてふさわしい者となるためには、どんなに訓練されなければならないか、また地上においてはどのように原則を実行し、天の生活を送らなければならないかということを示すために、キリストはおいでになった。(教育 72)

11月23日

一つの行為による莫大な収穫

「ところが、ひとりの貧しいやもめがきて、レプタ二つを入れた。……そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、『よく聞きなさい。……みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである。』」（マルコ 12:42～44）

自然界における神の法則によって、原因に結果が伴うことは不変の真理である。収穫は、種まきをあかすする。そこにみせかけは通用しない。人は世間を欺いて、自分では手をくだしたことの無い奉仕について賞賛と報酬をうけることができるかもしれない。しかし、自然界にはあざむきというものがあり得ない。不忠実な農夫に対しては収穫がその罪を宣告する。

このことはまた最高の意味において、霊的な世界においても真理である。悪が成功しているのは、みせかけだけであって、実際にはそうではないのである。学校をずる休みする子供、学業をなまける少年、主人の利益のために働こうとしない雇い人、どんな商業や職務にあろうと、自分の最高の責任に対して不誠実な者、一こうした人たちは、その悪事が人目につかない間は、自分はいまやうにやっているとぬぼれるかもしれない。しかしそうではない。彼は自分自身を欺いているのである。人生の収穫は品性である。そして現世と来世における運命は実にこの品性によって決定されるのである。

収穫は、まかれた種の繁殖である。それぞれの種は、「その類にしたがって」実をむすぶ。われわれの中に宿っている品性の特徴もその通りである。利己心、おのれを愛する心、自負心、放縦は、繁殖を続けているうちに、ついには、不幸と破滅を招くのである。……愛と同情と親切は、祝福という実を結び、それは減びることのない収穫となる。

収穫において種は幾倍にもふえる。一粒の麦でも、幾度もまいているうち

には、ふえつづけてついには全地を黄金の穂波でおおうであろう。ただひとりの一生、たった一つの行為でさえも、その影響はこれと同じようにひろがるのである。

キリストに油をそそぐために割られたあの石膏のつぼの思い出は、幾世紀もの長い間どんなにか愛の行為を促したことであろう。名もない貧しいひとりのやもめの「レプタ二つ……それは一コドラントに当る」(マルコ 12:42) 献金によって、どんなに数えきれないほどの献金が救い主の働きにささげられたことであらう。……

「豊かにまく者は、豊かに刈り取る」のである。農夫は、種をまきちらすことによって、その種を幾倍にもふやす。そのように、与えることによって、恩恵は増すのである。与えつづけてもいいように、神の御約束には十分な物が保証されている。

そこには、もっと深い意味がある。われわれが人にこの世の恩恵を分け与えるとき、それを受ける人は、感謝の気持ちから、心を開いて霊的な真理を受け入れるようになる。こうしてそこには永遠の生命という収穫がもたらされる。(教育 115～117)

11月24日

苦難にもかかわらず、 パウロとシラスは讚美する

「真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいていた。ところが突然、大地震が起って、獄の土台が揺れ動き、戸は全部たちまち開いて、みんなの者の鎖が解けてしまった。」
(使徒行伝 16:25, 26)

十字架の使命者たちが教えを説いて回っていたとき、占いの霊につかれた女が彼らについてきて「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」と叫んだ。「そして、そんなことを幾日間もつづけていた。」……

それから聖霊の導きのもとに、パウロは悪霊に女から出て行けと命令した。……女は悪霊から解放され、正常な心を取りもどすと、キリストに従う者となることを望んだ。すると彼女の主人たちは、自分たちの職業のことが気になってきた。彼らは、彼女の占いや予言から金銭を得る望みが全くなかったこと、また、……彼らの収入源がまもなく全く断たれてしまうことを知った。……

熱狂的な興奮をかきたてられ、群衆は、いつせいに弟子たちに反対して立ち上がった。騒ぎがおこる気配がひろがり、官憲はそれを知って、使徒たちの上着をはぎとり、彼らをむち打つように命令した。「それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかとかけておいた。」……

ほかの囚人たちは、奥の獄屋から祈りと歌が聞こえてくるのを、驚きながら聞いていた。彼らは、夜のしじまを破って聞こえてくる悲鳴やうめき、のろいや悪口には慣れていたが、陰気な地下室から祈りやさんびの言葉が上ってく

るのをこれまで聞いたことがなかった。……

しかし人々が残酷で復讐心に満ちていたあいだも、あるいは彼らにかかっている厳しい責任に対して怠慢の罪を犯していたあいだも、神はそのしもべたちに対して恵み深くあることをお忘れにならなかった。全天は、キリストのために苦しんでいる人々に関心をよせ、獄屋をおとずれるために天使たちがつかわされた。天使たちの足音に地はゆれ動いた。重いかんぬぎのかかった獄屋の戸が開け放たれ、くさり足かせは囚人たちの手足から落ち、明るい光が獄中にみなぎった。

驚いて立ち上がった獄吏は、獄屋の戸が全部開いているのを見て狼狽し、囚人たちが逃げってしまったという恐怖が心にひらめいた。……… 彼が剣を抜いて自殺しようとする、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」と、元気づける言葉を語るパウロの声が聞こえた。囚人たちは、ひとりの仲間を通して働きかける神の力にひきとめられて、ひとり残らずもとの場所にいたのである。………

獄吏は剣を落とし、……… それから、ふたりを外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか。」(患難から栄光へ上巻 228～233)

11月25日

ルデヤのもてなし

「ところが、テアテラ市の紫布の商人で、……ルデヤという婦人が聞いていた。……この婦人もその家族も、共にバプテスマを受けたが、その時、彼女は『もし、わたしを主を信じる者とお思いでしたら、どうぞ、わたしの家にきて泊まって下さい』と懇望し、しいてわたしたちをつれて行った。」(使徒行伝 16:14, 15)

「ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そこにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。ところが、テアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。主は彼女の心を開い」と、ルカは引きつづき述べている。ルデヤは真理をよろこんで受け入れた。彼女もその家族も改心してバプテスマを受け、また、彼女の家に泊まるようにと彼女は使徒たちに懇望した。(患難から栄光へ上巻 228)

神の御霊は、啓発されたいと望む者の理解力だけを啓発させることができる。わたしたちは神がルデヤの耳を開かれたため、彼女がパウロによって語られるメッセージに耳を傾けたことを読む。神の勧告全体とルデヤが受け入れなければならない重要不可欠な事柄をみな宣べること—これが彼女の改心のためにパウロがなすべき役割であった。そして、それから恵みに富まれる神がご自分のみ力を働かせ、魂を正しい道へ導かれた。神と人間の代理人が協力し、働きは完全な成功であった。(SDA パイブル・コメント [E・G・ホイト・コメント] 6巻 1062)

〔当局〕は、牢獄に訪れ、使徒たちに自分たちの不正と残酷さを詫びて、自ら彼らを牢獄の外へ導き、彼らに町を出て行くように懇願した。……使徒たちは望まれていない場所に居つづけようとは思わなかった。彼らは長官たちの要求に応じたが、出立を急ぐことはしなかった。……彼らは喜んで牢獄からル

デヤの家へ行き、そこでキリストの信仰への新しい改心者たちに出会い、神がどのように素晴らしい方法で彼らを扱ってくださったかをみな語った。彼らは自分たちの夜の経験、また獄吏や囚人たちの改心を語った。

使徒たちはピリピでの働きがむだだったとは思わなかった。彼らは大いに反対と迫害に会ったが、獄吏とその家族の改心は、彼らが耐えた恥辱と苦痛をあがなう以上のものであった。ピリピの人たちは、使徒たちのふるまいや心の平静さのうちに、イエス・キリストの宗教の精神を見たのであった。……

ふたりが不正に投獄されて、奇跡的に救出されたことは、その地方一帯に知らされて、これがなかったら決して接することがなかったほどの多くの人々が、使徒たちの働きを知るようになった。キリスト教は高められ、信仰への改心者は大いに強められた。(預言の霊 3 卷 385, 386)

11月26日

パウロは「伝統」と「哲学」に対して 警告する

「あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。」(コロサイ 2:8)

異教の習慣に取り巻かれ、その影響下にあつてコロサイの信者たちは、福音の単純さから引き離される危険にさらされていた。そしてパウロはこれについて警告を与え、彼らにキリストこそ唯一の安全な導き手であると言つた。……「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあつて歩きなさい。また、彼に根ざし、彼にあつて建てられ、そして教えられたように、信仰が確立されて、あふれるばかり感謝しなさい」。……

キリストは人を惑わす者たちが現れることを預言しておられた。彼らの感化を受けて「不法がはびこ」り、「多くの人の愛が冷える」のである(マタイ 24:12)。主は教会が敵の迫害からよりも、もっと、この悪からの危険にさらされるであろうと弟子たちに警告しておられた。パウロは繰り返し、こうした誤つた教師たちに注意するよう信者たちに警告した。何よりもまず、この危険から彼らは身を守らなければならない。誤つた教師たちを受け入れることにより、彼らは誤つた道を進み、その過ちにより敵は靈的な知覚を鈍らせ、福音の信仰を新しく受け入れたばかりの人々の確信をぐらつかせるのである。

キリストが標準であられ、彼らはそれによって、紹介される教理をテストしなければならなかつた。キリストの教えと一致しないものは、すべて拒まなければならなかつた。キリストは罪のために十字架におかかりになり、死からよみがえられて、昇天された。これこそ彼らが学び、そして教えなければならない救いの科学であつた。

キリスト教会を取り巻くさまざまな危険について神が警告されたことばは、今日われわれも聞かなければならない。弟子たちの時代に、人々は伝統や哲学によって聖書を信じる信仰を破壊させようとしたが、今日は、高等批評、進化論、心霊術、神知学、汎神論など心を楽しみます意見によって、義の敵は魂を禁じられた道へ導こうとしている。多くの人たちにとって、聖書は油のないランプのようなものである。なぜなら、彼らの心は誤解と混乱しか招かないような、推論的信念に向けられているからである。

分析し、推測し、組み立て直す「高等批評」の作業が、神の啓示としての聖書についての信仰を破壊している。高等批評は、神のみことばから、人の生活を支配し、高め、靈感を与える力を奪っている。心霊術によって多くの人々は、欲望が最高の律法であり、放縦が自由であり、人は自分にだけ責任があるのだと信じるよう教え込まれている。……

もっと高く、もっと純潔で、もっと崇高な生活の力が、われわれに大いに必要である。(患難から栄光へ下巻 166～171)

11月27日

奉仕のために必要不可欠な資質

「彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、『ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか』。ペテロは言った、『主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです』。イエスは彼に『わたしの小羊を養いなさい』と言われた。」(ヨハネ 21:15)

使徒行伝には使徒ペテロの後期の働きについては、ほとんど記されていない。……十字架の使命者たちがエルサレムやその他の場所を訪問し、信者の数が増えるにつれて、ペテロの持っていた才能は、初期のキリスト教会にとって測り知れない価値を持つものであることがわかった。ナザレのイエスについての彼のあかしは、広く遠く影響を及ぼした。彼の上には二重の責任が負わされていた。彼は未信者たちの前で積極的にメシヤについてあかしを立て、彼らを改心させるよう熱心に働くとともに、信者たちに特別に働きかけて、キリストに対する彼らの信仰を強めた。

ペテロは、自己放棄へと導かれて、完全に神の力により頼むようになったときはじめて、大牧者のもとで働く羊飼いとしての召しを受けた。キリストは、ペテロがキリストを拒む前に、「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と、ペテロに言っておられた(ルカ 22:32)。このみことばは、この使徒がやがて、信仰に導かれるはずの人々のためになさねばならない、広範で効果的な働きのことを意味していた。

ペテロ自身の罪と苦しみと悔い改めの経験が、この働きのために、彼を準備させたのであった。彼は自分の弱さを知るまで、キリストにより頼むことの必要を悟ることができなかった。誘惑の嵐のただ中で彼は、人は自己を全く放棄して救い主により頼むときにはじめて、安全に歩むことができるということを理解するようになっていた。……

キリストはペテロに、奉仕の条件をたった一つだけ言われた、「わたしを愛するか」。これが最も大切な資格である。……キリストへの愛は気まぐれな感情ではなく、生きた原則であり、心の中にある変わることのない力としてあらわれるものである。……

救い主がペテロを取り扱われた方法は、ペテロと彼の仲間たちにとって一つの教訓を含んでいた。ペテロは主を拒んだが、主が彼に対して抱いておられた愛は、決してゆるがなかった。そしてこの使徒が、みことばを他の人々に伝える働きに携わるようになったとき、彼は罪を犯す者に、忍耐と同情とゆるしの愛をもって接しなければならなかった。彼は自分自身の弱さと失敗を思い起こして、キリストが彼を取り扱われたように、優しく心を配って、羊や小羊たちを扱わねばならなかった。……

彼は絶えずナザレのイエスを、イスラエルの望み、人類の救い主としてあがめた。彼は自分自身の生涯を、大教師の訓練のもとにおいた。また、力のかぎりあらゆる手段を用いて、信者たちを活動的な奉仕のために教育しようとした。(患難から栄光へ下巻 212～216)

11月28日

いにしえの道に戻る人々

「主にあがなわれた者は帰ってきて、その頭に、とこしえの喜びをいただき、歌うたいつつ、シオンに来る。彼らは楽しみと喜びとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。」(イザヤ 35:10)

世には自分たちにゆだねられた賜物のために神に対して何の義務も感じない男女に満ちている。彼らは神がタラントを委ねられたのは自己満足のためではなく、ご自身のみ名の栄光のためであることを自覚しない。彼らは榮譽を熱望している。……

神がただならぬ能力を備えられた人々がいる。彼らはよく考え、精力的で、徹底的である。しかし、彼らのうち多くの者は自分自身の利己的な目的を達成することに夢中になり、神の誉れや栄光を考えない。これらの人々のうちある者は真理の光を見たことがあるが、自らに誉れを帰すため、神を万事の最初、最後、最善とせず、聖書の真理から懐疑主義と無神論へ迷い込む。これらの人々が神の懲らしめに阻まれ、苦難を通していにしえの道を探るよう導かれるとき、懐疑主義の霧は彼らの思いから一掃される。彼らのうちある者は悔い改め、いにしえの愛に戻り、彼らの足を主に贖われた者たちが歩むようにとしかれた道に置く。彼らはもはや金銭への愛着や利己的な野心によって動かされることはない。心に働く神の御霊が金や人の賞賛よりも高く評価される。この驚くべき変化が起こるとき、思想は神の御霊によって新しい通路へ向けられ、品性は変えられる。そして魂の憧れは天の事柄に向かって伸ばされるのである。

今日真の宗教には力がある。それは人にほこりや利己心や不信という頑固な感化力に打ち勝たせ、真の信心という単純さのうちに天との生きたつながりを表すことができるようにする。キリストが与えて下さる恵みは、人を夢中にさ

せるサタンのすべての誘惑に超越させる。それは天の真理の前進のために活動的で献身的で忠実な働き人として彼らをイエスの十字架へと導く。

神への忠誠は各時代にわたって信仰の英雄を特徴づけてきた。彼らが世の前で目立つところへ置かれたとき、彼らの光が輝き出た。キリストの命令である「前進せよ」に対する彼らの従順は、他の人々も神に栄光を帰すように導いてきた。

今日道徳的英雄、すなわち自己否定の高尚な生涯を送っている男女がいる。彼らには世俗の名声に対する野心がない。彼らの意志は神のみ旨に従っている。神の愛が彼らの働きを鼓舞する。善をなすことと魂を救うことが彼らの最高の目的である。

彼らは本物の知識、すなわちキリストによって次の言葉の中に表されている知識を持っている、「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」(ヨハネ 17:3)。(原稿 51, 1900 年)

11月29日

恵みの勝利を表す

「あなたがたはわが証人であると主は言われる。」(イザヤ 43:12)

忠実なキリストの大使は、真理の旗印を恥じることはない。彼は真理がどれほど人気がなくても、宣布することをやめない。あらゆる場所で、時がよくても悪くても、彼は救いの良き知らせの到来を告げる。神のための伝道者は、危険に直面し、欠乏に耐え、真理のための非難を受けるよう要求されるが、危険と困難と譴責のただ中で、彼らはなお旗印を高く掲げるのである。

第三天使はささやくような調子や、ためらうようなやり方で自分のメッセージを宣布するのではない。彼は中空をすみやかに飛びながら、大いなる声で叫ぶのである。これは神の僕たちの働きが熱心にすみやかに行われることを示している。彼らは真理のための勇敢な証人とならなければならない。彼らの顔に恥じたところはなく、頭をあげて、自分たちを照らす義の太陽の明るい光線をもち、自分たちの贖いが近づいていることを喜んで、世に最後の憐れみのメッセージを宣布しに出て行くのである。

これらの最後の時代の証人たちは、イエス・キリストの勇敢な兵卒たちである。彼らは来たるべき世の力を味わった。彼らの足はすべる砂の上ではなく、堅固な岩の上にあるのである。彼らはひとたび聖徒たちに伝えられた信仰から簡単に動かされることはない。これらの人々は困難に対処するために自分たちの指導者によって強められる。彼らは義の使命者であり、キリストの代表者であり、恵みの勝利を表すのである。

神に選ばれたこれらの人々から真理が輝き出る。それは彼らの唇から聞かれ、彼らの顔に反射し、彼らの生活の中に実践される。彼らは純潔と腐敗していないことで際立っている。キリストの恵みは品性に、精錬し、高尚にする感化力を及ぼしている。

能力と精錬さと教育のある多くの男女は自分たちの一切を主の側に投じるであろう。多くの者が、キリストの無尽蔵の富を宣布するために、友と別れ、あらゆる世俗的な利益を犠牲にするであろう。彼らの生活は世にキリスト教の力の証拠を与える。彼らは福音が意味するところ、すなわち救いに至る神の力を証言する。福音の真理の明るい光線が彼らから、闇の中にいる人々の道の上にひらめく。彼らの揺るがない忠誠は天の書に登録されている。(原稿 51, 1900 年)

キリストが歩まれたように歩む人々、すなわち忍耐強く、優しく、親切で、柔和で、心の低い人々、キリストと共にくびぎを負い、このお方の荷を持ち上げる人々、このお方のように魂を切望する人々—これらの人々が自分たちの主の喜びに入るのである。彼らはキリストと共にこのお方の魂の苦しみを見て満足するのである。天は勝利する。なぜなら、サタンとその使の墮落によって空いた天の空間が、主に贖われた者たちによって埋められるからである。(ビュー・アンド・ワールド 1900 年 5 月 29 日)

11月30日

諸原則を表す神の民

「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。」(ヨハネ 17:18)

ご自分の民を通して、御国の諸原則を表すことが神のご計画である。彼らが生活と品性においてこれらの諸原則を表すことができるように、神は彼らを世の習慣、ならわし、実践から分離したいと願っておられる。ご自分のみ旨を知らせることができるように、このお方は彼らをご自分にもっと近づけようとしておられる。

今日ご自分の民のためのご目的はエジプトからイスラエルを導き出された時と同じである。神の教会の中で表される神の善と憐れみと正義と愛を眺めることによって、世がこのお方のご品性のあらわれを持つのである。そして、神の律法がこうして生活の中に具現化されるとき、世でさえ神を愛し畏れ仕える人々は世にあるほかのどの民よりもすぐれていることを認めるのである。

セブンスデー・アドベンチストは他のどの民にもまさって敬神の模範であるべきであり、心と会話において聖であるべきである。彼らにはかつて死すべき人間にゆだねられたものの中で最も厳粛な数々の真理がゆだねられてきた。すべての恵みと力と効果の賜物が惜しみなく備えられてきた。彼らは天の雲に乗ってキリストがまもなく戻られるのを待ち望んでいる。自分たちの信仰が生活の中の支配的な力でないという印象を彼らが世に与えることは、非常に神を辱めることである。

サタンの誘惑の力が増し加わっているがゆえに、わたしたちの生きている時代は神の子らにとって危険に満ちている。そしてわたしたちは一歩ごとに保証と義のうちに歩むことができるように、絶えず大教師から学んでいる必要がある。素晴らしい光景がわたしたちの前に開かれつつある。そしてこの時代

に神の民だと公言する民の生活のうちに生きた証が担われなければならない。それによって、世がこの時代、すなわち至る所で悪が支配している時代に、なお自分の意志をわきへおき、神のみ旨を求めている民一心と生活に神の律法が記されている民一がいることを見ることのできるためである。

神はキリストの名を帯びている人々がご自分を表すよう期待しておられる。彼らの思想は純潔で、彼らの言葉は高尚で引き上げるものである。キリストの宗教が彼らのなすこと語ることすべてに織り込まれなければならない。彼らは聖化され、精錬された聖なる民となり、自分たちと接触するすべての人々に光を伝達しなければならない。真理を自分たちの生活に具現化することによって彼らが地上において讃美となることがこのお方のご目的である。

キリストの恵みはこれを実現するのに十分である。しかし、神の民は自分たちが福音の諸原則を信じ、実践するときのみ、このお方のご目的を果たすことができることを覚えていなければならない。教会は約束の上に立つようにと召されているが、彼らが神に与えられた能力をこのお方の奉仕に捧げるときにのみ、その約束の満ちみちた徳と力を享受するのである。(両親と教師への勧告 321, 322)

研究 17

三重のメッセージ



第三天使のメッセージ

Part 4

黙示録 13 章の獣と小羊のような獣

「彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」(黙示録 17:14)。

「イエスは、聖所における奉仕を終わり、至聖所にはいって、神の律法を納めた箱の前に立たれたときに、世界に対する第三の使命をたずさえたもうひとりの方強い天使を、お送りになった。……『彼らは、獣とその像と激しく戦わなければならない。彼らが永遠の生命を得る唯一の希望は、堅く立つことである。彼らは、その生命が危機にひんしても、真理に固く立たなければならない』と天使は言った。第三の天使は、『ここに、神の戒めとイエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。」(初代文集 414, 415)

「天の主は、世が自分たちの支配者を選ぶことを許される。すべての人に黙示録一三章を注意深く読ませなさい。なぜなら、それは大いなる者も小さき者も、すべての人に関係があるからである。すべての人は、真の生ける神の側、すなわち第七日目の安息日のうちに創造の記念を世にお与えになったお方の側か、もしくは偽りの安息日の側、すなわち自らをすべて神と呼ばれたり拝まれたりするものよりも高くおき、神の戒めを守る忠実で真実な人々を圧迫することによってサタンの特質を自ら帯びた人々によって設立された安息日の側に立つかを決めなければならない。この迫害の勢力は自分が設立した安息日の遵守を強く迫ることによって、獣の礼拝を強要するようになる。こうして彼は神を汚し、「自ら神の

宮に座して、自分は神だと宣言する」(テサロニケ第二 2:4)。

この偽りの安息日の礼拝は、プロテスタント教会を神から引き離し、彼らを裸のままに取り残したくさびである。彼らには自分たちの偽りの神を支持する聖句は一つもなかったが、なお欺瞞が、すなわち年月を経て古くはあるが相変わらずの欺瞞が、敬われ、高められるために推奨された。その一方では第四条の安息日が踏みにじられ、神が辱められたのであった。……

天から追放されたサタンは、彼の詭弁によって目隠しされた世を、「主はこう言われる」よりもサタンの神学を受け入れた使たちを導いたのと同じ方法で導いている。すでに諸教会は裸であり、覆いがない。大欺瞞者と同様、彼らには言い訳の余地がない。なぜなら、彼らには、率直で明白な鋭い神のみ言葉があるからである。彼らが忠実で忠義な神の王国の臣民を押さえつけ、彼らから良心の自由を奪い、判事や裁判官の前に引き出し、彼らに有罪判決を宣告し、投獄し、鎖につなぎ、そして死刑にさえ処している一方で、彼らは自ら宇宙の前で、永遠のエホバの律法に対する断固とした強情な侮辱を示しているのである。〔黙示録 14:1～4 引用〕。

144000 人の説明の中で顕著な特徴の一つは、彼らの口には偽りがないことである。主は「その霊に偽りのない人はさいわいである」と仰せになった(詩篇 32:2)。彼らは神の子であると公言しており、小羊の行くところへはどこへでも従う者として表されている。彼らは聖なる奉仕のために整えられ、聖徒の義である白い麻布をまとうシオンの山に立つ者としてわたしたちの前に表されている。しかし天で小羊に従う人はみな、まずこの地上で、信頼心と愛に満ちた心からの服従のうちに、このお方に従っていなければならない。突発的に、あるいは気まぐれにこのお方に従うのではなく、確信をもって、誠実に、群れが羊飼いに従うように従うのである。」(原稿 14 卷 91～93)

「主は喜んでご自分の民に、世に対して担うべきテストとなるメッセージとして第三天使のメッセージを与えてこられた。ヨハネは世から区別され、分離された民を見た。彼らは獣とその像とを拜むことを拒み、神の印を帯びていた。それはこのお方の安息日の遵守、すなわち生ける神、天地の創造主の記念として第七日目を聖なるものとして守ることである。彼らのことについて、使徒は『ここに、神の戒めとイエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある』と記している。」(クリス・コレクション 147)

王国の象徴

「四つの大きな獣が海からあがってきた。その形は、おのおの異なり、……この四つの大きな獣は、地に起らんとする四人の王である。……彼はこう言った、『第四の獣は地上の第四の国である……』」(ダニエル 7:3, 17, 23)。

「ダニエルに与えられた獐猛(どうもう)な獣の幻は、地上の帝国を表していた。」(SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホト・コメト] 4 巻 1171)

「聖霊は、おそろしい猛獣によって地上の王国を象徴した」(キリストの実物教訓 54)

「第四の獣は、恐ろしい、ものすごい、非常に強いもので、大きな鉄の歯があり、食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは、その前に出たすべての獣と違って、十の角を持っていた。」(ダニエル 7:7)

「見よ、大きな、赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた。」(黙示録 12:3)

「これらの象徴が用いられている一連の預言は、黙示録一二章から、キリストを誕生の時に滅ぼそうとした龍から、始まっている。龍は、サタンであると言われている(同 12:9)。救い主を殺すためにヘロデを動かしたのは、サタンであった。しかし、キリスト教時代の初期において、キリストと彼の民に戦いをいどんだサタンの主力は、ローマ帝国であり、そこにおいて最も有力な宗教は、異教であった。こうして、龍は、第一義的にはサタンを表わすが、第二義的には異教ローマの象徴である。」(各時代の争闘下巻 157)

法王ローマ

「わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があつて、頭には神を汚す名がついていた。わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようなものであった。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。」(黙示録 13:1, 2 [ダニエル 7:3 ~ 8 を参照のこと])

「〔黙示録〕第一三章(1 ~ 10 節)にはもう一つの獣が描かれていて、それは『ひ

ように似ており』、龍は『自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた』。この象徴は、たいていのプロテスタントが信じてきたように、かつて古代ローマ帝国が握っていた力と位と権威とを継承した法王権を表わしている。ひょうに似た獣について、次のように言われている。『この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、……そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた』。ダニエル書七章の小さい角の描写とほとんど同じであるこの預言は、疑いもなく法王権を指している。

『四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた』。そして、『その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けた』と預言者は言っている。また、『とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない』とある。四十二か月は、ダニエル書七章の『ひと時と、ふた時と、半時の間』、つまり三年半、すなわち 1260 日と同じで、その期間のあいだ、法王権は神の民を圧迫するのであった。この期間は、すでに述べたように、法王権が至上権を握った紀元 538 年に始まり、1798 年に終わった。(各時代の争闘下巻 158)

大言を吐〔く〕 ……口

「彼は、いと高き者に敵して言葉を出し……彼はまた時と律法とを変えようと望む。」(ダニエル 7:25)

「この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ」(黙示録 13:5)

「一つの小さい角が出て、……はなはだしく大きくなり、……真理を地に投げうち、ほしいままにふるまって、みずから栄えた。」(ダニエル 8:9, 12)

「彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。」(テサロニケ第二 2:4)

「ローマ教会が権力を握ったことは、暗黒時代の始まりを意味した。教会の権力が増すにつれて暗黒は深まった。信仰は、真の基礎であるキリストから、ローマ法王へと移された。人々は、罪の許しと永遠の救いを求めて神の子によりのむかわりに、法王や、法王が権力をゆだねた司祭や司教たちにたよった。彼らは、法王はこの地上における彼らの仲保者であって、法王によらなければだれも神に

近づくことができない、と教えられた。さらに、法王は神に代わって彼らの前に立つ者であるから、絶対に服従すべきであると教えられた。彼の要求に従わない者が、最も厳しい罰をその心身に受けるのは、当然のこととされた。

こうして人々の心は神から引き離されて、誤りの多い残酷な人々に、いや、彼らを通して力を振うところの暗黒の君自身に向けられた。

罪は聖潔の仮面をかぶった。聖書が圧迫され、人間が自分を最高のものと見なすようになるとき、そこには、欺瞞と惑わし、汚れた罪悪しか期待できない。人間の律法と言いつて高められるにつれて、神の律法を放棄するとき常に起こる腐敗があらわれてきた。」(各時代の斗争闘上巻 50)

「法王制は、神の律法を変更しようとした。偶像礼拝を禁じる第二条を律法から除去し、第四条は、七日目のかわりに第一日を安息日として守ることを公認するように変更された。しかし、法王側の人々は、第二条を除去したことを、それは第一条に含まれているから不必要であり、われわれは神がわれわれに理解させたいと望んでおられるとおりに律法を与えたのであると主張する。これは、預言者が預言したところの変更ではない。預言されたその変更は、計画的で故意の変更である。すなわち『彼はまた時と律法とを変えようと望む』。第四条の変更こそ、まさしくこの預言の成就である。これに関して主張できる権威は、ただ教会の権威のみである。ここにおいて、法王権は、公然と自らを神よりも高めているのである。」(各時代の斗争闘下巻 166)

忘れてはならない……

「地に住む者で、世の初めからほふられた小羊のいのちの書に、その名をしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう。」(黙示録 13:8 英語訳)

「また、ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない。……プロテスタントが日曜日をあがめる運動において、ローマ教会の助けを受け入れようと企てる時、彼らは自分たちのしていることがわからないのである。プロテスタントが自分たちの目的の達成に夢中になっている間に、ローマ教会は、その権力を再び確立して、失われた至上権を回復することをねらっているのである。教会が国家の権力を用いたり、支配したりするような、また宗教上の制度が国家の法律によって強制されるような、すなわち、教

会と国家の権威が良心を支配するような、そのような原則が米国にひとたび確立されるならば、この国におけるローマ教会の勝利は確実なものとなる。

神のみ言葉はこのさし迫った危険について警告を与えてきた。これが顧みられないならば、プロテスタントの世界は、ローマ教会の目的が実際に何であったかを知ったときには、もはや手遅れになってそのわなを逃れることができないであろう。ローマ教会は黙々としてその勢力をのぼしつつある。その教えは議会に、教会に、また人々の心に影響を及ぼしている。法王制は堂々たる大建造物を築き上げているが、その奥まった部屋では昔の迫害がくり返されるであろう。自分が手を下す時が来たら自分自身の目的を押し進めるために、教会は、ひそかに、そしてあやしまれないように、勢力をのぼしつつある。この教会が何よりも望むものは、有利な立場である。そしてこれはすでに教会に与えられつつある。われわれはローマ教会の真の目的が何であるかをまもなく見、かつ感じるであろう。神のみ言葉を信じ、それに従う者はだれでも、そのことによって非難と迫害を受けるであろう。」(各時代の争闘下巻 340, 341)

新しい大国

「わたしはまた、ほかの獣が地から上って来るのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。」(黙示録 13:11)

「預言はプロテスタント主義を小羊のような角を持っているが、龍のように語る」と表している。すでにわたしたちは龍の声を聞き始めている。」(SDA バイブル・コメント [E・G・初作・コメント] 七巻 975)

「小羊のような角をもった獣は、『地から上って来る』のが見えたのであった。このように表わされる国は、自国を確立するために他の諸国を覆すのではなくて、まだだれにも占有されていない領土に起こり、徐々にまた平和のうちに成長する国でなければならない。したがって、旧世界の込み合った争い合う国々の中、すなわち、あの『民族、群衆、国民、国語』の荒海の中からは起こり得ないのである。それは、西半球の大陸に求められねばならない。

1798年に、新世界のどんな国が、勢力を伸ばし、将来強大な国家になる可能性を示して、世界の注目を集めていたであろうか。この象徴が、どの国に適用

されるかは、実に明白である。この預言の指示するところに合致する国は、ただ一つしかない。それは、疑いもなく、アメリカ合衆国を指している。」(各時代の
大争闘下巻 159)

「小羊のような角は、若々しさと無垢と温順さとを示すもので、一七九八年に『上
つて来る』のを預言者が見たときの米国の性格をよく表わしている。最初、米国
に逃れ、王の圧迫と司祭たちの迫害からの避難所を求めた亡命キリスト者たちの
中には、政治的自由と宗教的自由の広い基盤の上に政府を樹立しようと決意し
たものが多くあった。彼らの意見は、独立宣言の中に織り込まれ、『すべての人
は平等に造られ』、『生命、自由、および幸福の追求』という奪うことのできない
権利を与えられている、という偉大な真理の表明となっている。そして、憲法は、
国民に自治権を保証し、一般投票によって選ばれた代議員が法律の制定と執行
にあたるべきことを規定している。宗教の自由も保証され、すべての人は良心の
命じるところに従って神を礼拝することが許されている。共和主義とプロテスタ
ント主義が、国家の根本原則となった。これらの原則が、その権力と繁栄の秘け
つである。」(各時代の争闘下巻 160, 161)

「この象徴の持つ、小羊のような角と龍のような声は、ここで表わされている
国家の宣言と実行との著しい矛盾を示すものである。国家が『物を言う』とは、
その立法および司法権の活動のことである。米国は、そのような行為によって、
国家の方針の基礎として宣言した自由と平和の原則を裏切るのである。それが
『龍のように』語り、『先の獣の持つすべての権力』を働かせるという預言は、明
らかに、それが、龍やひょうに似た獣によって象徴される国々が表わした狭量と
迫害の精神を持つようになるということを予告している。」(各時代の争闘下巻
161, 162)

獣の像と獣への像 —Image of the beast and to the beast—

「そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住
む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拜ませた。……さらに、先の獣の
前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受
けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。」(黙示
録 13:12, 14)

「二つの角を持った獣が『地と地に住む人々に、……先の獣を拝ませ』るという言葉は、この国が権力を行使して、法王権に対する礼拝行為となるような何かの遵守を強要することを示している。」(各時代の争闘下巻 161)

「宗教の自由の国であるアメリカが、良心を強制し、人々に強要して偽りの安息日を尊ばせることによって法王権と一つになるとき、地球上のすべての国の民が、彼女の模範に従うようにと導かれる。」(教会への証 6 巻 18)

「『獣への像』は、プロテスタント諸教会が自分たちの教義を強制するために公権力の助けを求めるときに起きてくるところの、そうした背教のプロテスタント教会を表わしている。」(各時代の争闘下巻 165)

獣の刻印

「この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。」(黙示録 13:17)

「預言は、獣とその像とを拝することについて警告したあとで、『ここに、神の戒めとイエスの信仰を守る聖徒……がある』と宣言する。神の戒めを守る人々が、獣とその像とを拝み、その刻印を受ける者たちと、このように対照されていることから見ると、神を拝む者と獣を拝む者との間の区別は、一方は神の戒めを守り、他方はそれを犯すことにあるとわかる。」(各時代の争闘下巻 166)

「日曜日遵守が法律によって強いられ、真の安息日を守るべきことが世界に明らかにされるその時に、神の戒めを破って、単にローマの権威によるものにすぎないところの戒めに従う者は、それによって、神よりも法王教をあがめるのである。そのような人は、ローマに敬意を払い、ローマが定めた制度を強制する権力に敬意を払っている。彼は、獣とその像を拝んでいる。こうして、神がご自分の権威のしるしであると宣言された制度を拒んで、その代わりに、ローマがその至上権のしるしとして選んだものを尊重するときに、人々は、それによって、ローマに対する忠誠のしるし、すなわち『獣の刻印』を受けるのである。こうして、この問題が人々の前に明らかに示されて、神の戒めと人間の戒めのどちらかを選ばねばならなくなったとき、それでも神の戒めを犯し続ける人々が、『獣の刻印』を受けるのである。」(各時代の争闘下巻 171)

「サタンとの最後の争闘において、神に忠実な者は、この世の一切の支持

がたたれるのを見る。彼らは地上の権力に従うために神の律法を破ろうとしないので、売ることも買うことも禁じられる。」(各時代の希望上巻 132, 133)

「主は神の都への道をはっきりと明示してこられた。しかし大背教者が道標を変更して、偽物一偽の安息日を打ち立てたのであった。彼は『わたしは神に相違らって働く。わたしはわが代表者である不法の者に力を与え、神の記念である第七日目の安息日を引きおろす。……人間の法律があまりにも強制的なものになるために、男も女もあえて第七日目の安息日を守ろうとしなくなるであろう。衣食の欠乏を恐れて、彼らは神の律法を犯すことによって世に連なるであろう。そして地は完全にわが支配下に置かれるのである』と言う。」(SDA バイブル・コメント [E・G・ホト・コメント] 4 巻 1171, 1172)

死刑令

「それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」(黙示録 13:15)

「世界は、恐ろしい結果をもたらす問題に直面しようとしている。地の権力者たちは、合同して神の戒めに逆らって戦い、『小きき者にも、大なる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に』、偽りの安息日を守ることによって教会の習慣に従うよう命じるのである(黙示録 13:16)。これに従わない者はすべて、法律上の刑罰を受ける。そして、ついには、彼らは死刑に値する者であると宣告される。他方、創造主の安息日を守ることを命じる神の律法は、それに対する服従を要求し、その戒めを犯すすべての者に神の怒りを警告する。」(各時代の大争闘下巻 374)

てちゃんとやることにある」—アンジェリック・アーノルド。

も う一つ同じことについての話があります。ぼくの家族がブラジルのいなかに住んでいたころ、ぼくをよろこばせるために一匹のネコがいました。赤毛のネコでちょうどリトアニアのヴェルバリスで飼っていたネコに似ていました。そのネコを見るとヨーロッパにいた小さいころを思い出しま



した。またそのネコのおかげで、ぼくは弟と妹がなくなったさびしさがずいぶんぐさめられました。毎朝、日が上ると、ぼくのネコがドアのところに来て、ニャオーとぼくを起こしに来ます。そこでぼくがドアを開けて、だきあげてくれるのを待っているのです。ある日、ぼくは不安を覚えながらドアを開けました。いつものニャオーが聞こえないのです。不吉な予感(よかん)のする沈黙(ちんもく)しかありませんでした。ぼくは家のまわり、馬小屋のまわり、穀倉(こくそう)のまわりといたるところを呼びながら、さがしてまわりました。そのとき、遠くからよわよわしいニャオーが聞こえました。その声をたどっていくと、ついにお父さんが手でほっていた井戸のところまで来ました。まだ水が出るところまでほっていなかったのは、何と幸運だったことでしょう!その井戸の中に、ぼくは自分のネコを見つけました。

すぐにぼくはお父さんを呼びました。お父さんはロープにむすびつけたバケツを持ってきて、そのバケツを井戸の中に下ろしていきました。それからお父さんは、なんとかそのバケツの中にネコが飛びこむように声をかけていました。でも、ネコは何をすればいいのかわからないのです。ついに、ぼくのお父さんは、ぼくをバケツの中に入れて下におろしました。お父さんが本当に注意深くやってくれてよかったです!ネコをつかまえようと準備しながら、下におりていつているあいだに、ネコはぼくの腕の中に飛びこんできました。そして満足そうにのどをならしていました。このできごとの思い出はぼくに教訓を教えてくださいました。何年ものあいだ、そのできごとのおかげでヨハネ 3:16 を特別に感謝するようになりました。神様は世を非常に愛して、ご自分のひとり子をここまで下に送ってくださったのです。ぼくは神様がバケツとロープだけを送られたのではないことを感謝します。そのかわりに、このお方はわたしたちを救い出すために、ご自分のひとりを送ってくださったのです。このお方はなしうる最高の仕事をしてくださいました。ぼくたちはこのお方のとこしえのみうでの中によじのぼろうではありませんか!

和風ロールキャベツ

〔材料〕

キャベツ	12 枚
油揚げ	3 枚
ごぼう	1 本 (18cm)
人参	1 本
◎昆布だし (粉末)	5 g (スティック 1 本)
◎はちみつ	大さじ 1
◎しょう油	大さじ 2
◎塩	適量 (お好みで調節してください)
◎しょうが	一片 (薄切り)
◎水	4 カップ

〔作り方〕

1. キャベツを蒸します (上記、材料は出来上がりに使用する枚数を記載していますが、丸ごと蒸すと簡単です。残ったキャベツはそのまま煮ても、甘みそで食べてもおいしいです)。
 2. 油揚げを開いて倍の大きさにしてから 4 分の 1 に切り分け、沸騰したお湯に入れて、油抜きをします。
 3. ごぼうは、4 分の 1 の細切りにして、ロールキャベツの長さ (6cm くらい) に切りわけ、水につけてあく抜きをします。
 4. 人参も 8mm くらいの細切りにして、ロールキャベツの長さに切りわけます。
 5. ◎のロールキャベツの煮込み汁の材料を鍋に入れて、油揚げ、ごぼう、人参を煮ます。
 6. 柔らかくなったら取り出して、キャベツの上に油揚げを載せ、その中にごぼうと人参をおいて巻き、最後に楊枝でとめます。
 7. 巻いた順から煮込み汁の入った鍋にもどし、全部入ってから弱火で煮ます。
 8. キャベツがとろとろに煮えたらできあがりです。
 - 9.
- いつもとひと味違うお手軽和風ロールキャベツです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)



【公開放送】 <http://www.4angels.jp>

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。



書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



ものごとをちゃんとやる

ある日、お父さんはオレンジを買いにぼくをお百姓（ひやくしょう）さんのところへ使いにやりました。ぼくたちはブラジルの二つの町のあいだに住んでいました。お百姓さんは数マイルはなれたところに住んでいました。ぼくは8才の男の子でした。家族のために二つの大きなふくろいっぱいオレンジを木からもぎ取りました。それが終わって、それら二つをむすびあわせました。それから、だれかにそれらを馬のせなかにほうりあげてくれるようにたのみました。

家に帰るとちゅう、牧草地（ぼくそうち）のあいだを通りました。ぼくはうれしくて一つにゆわえた二つの包みをつま先でさわっていました。半分までできたところで、ゆわえていた包（つつ）みがゆるんではなれ、とつぜん、地面（じめん）に落ちてしまいました。そして思いがけない第二の不幸（ふこう）が続きました。

ぼくが二つのふくろをむすぶチャンスもないうちに、大きなめ牛がぼくをびっくりさせました。め牛をおどして追いはらおうとするのに、まったくムシしています。オレンジのにおいをくんくんかいているとき、ぼくは思いました。だいじょうぶ、オレンジはふくろの中に入ってるんだから。でもそれはぼくのまちがいでした。

牛は一つのふくろを歯（は）でひろい上げて、それをぶんと地面にほうりなげました。それからもう一つのふくろもそうしました。ふくろはやぶけて、オレンジはあちこちころがり出ました。この小さな男の子がどうすることもできなくて、泣いているあいだ、牛はすきなだけオレンジを食べました。

牛が歩いていってしまった後、ぼくは考えました。この災難（さいなん）はだれのせいだろう。馬？まさか！牛？ちがう！ふくろをあげてくれた人？ちがう！ついに自分のせいでしかない、という結論（けつろん）にたっしました。なぜなら、はじめから、ぼくがふくろをちゃんとしぼらなかつたのだから。

通りすがりの人が、ぼくをかわいそうに思って助けてくれて、ぼくはのこったオレンジをのせて家に帰りました。でも、ぼくは大切な教訓（きょうくん）を学びました。「なすべき事をよく考えなさい」（列王記上 20：22）。何でもやる価値（かち）のあることは、ちゃんとやる価値があります。

「完全（かんぜん）は、並外（なみはず）れたことをすることにあるのではなく、ふつうのことを並外れ

